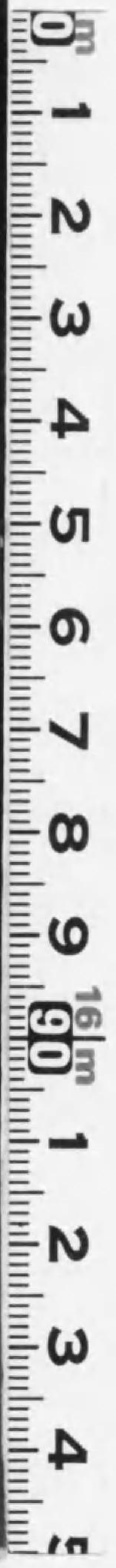




書叢藝文界世

入商のスニエウ

321
276



始



特263
986

書叢藝文界世

入商のスニエヴ
着ヤピスタエシ



世界文藝叢書刊行の趣旨

發行所寄贈本

極めて廣き範圍の讀書人を満足せしむべき圖書を提供するに
は種々困難なる條件に遭遇する。その主なるものを擧ぐれば、
一、極めて廉價に提供し得る圖書。二、文藝趣味を有する人、
また然らざる人にも歡迎さるゝ圖書。三、外國語の素養ある人
また之なき人にも讀まるゝ圖書。四、學生諸君又は一家、社會
國家の務めに多忙なる人に對し、極めて僅かなる時間に於て趣
味と實益を供給し得らるゝ圖書。五、永久に歡迎さるゝ圖書等
如上五項目は是非備へねばならぬ。本叢書刊行の趣旨はこの五
項目を基礎として、何人も知らねばならぬ世界の文藝上の名作

解 説

ウィリアム・シェークスピアの名は、十六世紀に於けるエリザベス朝の文學の代表者として、英國文壇の至寶として、世界の大文豪として、普ねく人に知られてゐる。その一代に遺した三十餘篇の戯曲は、不朽の文字として今に傳へられてゐる。けれど、其經歷は完全なる記録として残つてゐない。たゞ曖昧な口碑や、零碎な傳説をたどり、その作品を通して、幻影の一部を描いて見るに過ぎないのである。

この大戯曲家は、紀元千五百六十四年四月廿四日、英國の片田舎ワウイクシャー州のアヴォン川に臨んだストラットフォードに生れた。家系はよく分らないが、父は田地持ちで羊毛商をも營んでゐた。母は門閥家の娘であつたと云ふことだけが知れてゐる。

を、廣く紹介せんとするにある。

浩瀚なる作品を一小冊子に纏めんとするには、勢ひ原作の内容を壓搾せねばならぬ。名作を壓搾して其の精髓を表はし、十分に原作の妙味を傳へんことは極めて至難の事である。而も此至難を愉快に成し遂げ、理想に近からしめたのが本叢書である。本叢書が讀者の要求の幾分なりとも充たすことを得たならば、それは私の幸甚とするところである。

小 林 鶯 里

土地の習慣として父母は日曜毎に必ず教會へ出席しなければならなかつた、シェークスピアも伴はれて行つて、此處で宗教上の知識を得た。彼の戯曲の人物として、聖尼高僧が能くあらはれて来るのは、此時代の感化が深く頭に染み込んでゐたからであつた。また幼年時代の六七年を土地の語學校に通つて羅典文學を習つた。彼が詩情を養はれたのは、この古文學の智識の修得からであつた。

この時分、俳優の一團が屢ばストラッドフォードへ巡業して來た。彼は此演劇を見て、はやくから劇に興味を有つやうになつた。

彼は十八歳の時、自分よりは七歳も年上の娘と結婚した。この娘は彼の初恋の女だと云ふのに、艶話らしいものはいくらも残つてゐない。或は彼の作中に見ゆるジュリエットの如きが、彼をロメオと見立て、の戀女房に似通つてゐたのかも知れない。而して、彼の詩の泉は、この結婚によつて、益々豊

かに迸つて來たかも知れない。

二十一歳の時、彼は一家の没落から故郷を去るべく餘儀なくされた。彼は最愛の妻と三人の子供とを實家に托して置いて、新しい運命の光りを都に見出だすべく倫敦に向つた。天はこの大文豪のために、其天稟の才情を發露すべき途を開いてくれたのである。

彼の理想は劇であつた。彼は倫敦に出ると間もなく俳優になつた。極めて位置の低い俳優となつた。けれど、劇に關する彼の特別の才能は、いくらかも經たないうちに一座のマナーチャーに認められて、脚本の再訂や、改作を命ぜられるやうになつて。戯曲家としての彼の技倆を發揮すべき時が來たのである。

千六百十六年四月二十三日、五十三歳を一期として故園に安らかな往生を遂ぐるまでの間に、彼は三十七篇の名作を提供した。當時の劇壇に提供した

ばかしてなく、現在の劇壇にも其提供を依然として續けつゝあるのである。シェークスピアは一度此世を去つて、尙此世に生きて居るのである。

彼の劇作時代を凡そ四期に分つて見ると、第一期の作は『間違ひの喜劇』だとか、『ヴェロナの紳士』だとか、極めてはなやかなものが多い。而して、『ヘンリー六世』や、『リチャード二世』のやうな史劇も書いてゐる。第二期の作は『ヴェニス商人』だとか、『悍婦馴らし』だとか、喜劇を澤山に書いてゐる。第三期の作になると、『シーザー』、『ハムレット』、『オセロ』、『マクベス』の如き、罪惡や煩悶を主とした人間の暗黒面の描寫に努めたものが多い。第四期の作は、彼が故園に餘生を安らかに送つてゐる時代に書いたのだから、『シムベリン』、『あらし』、『冬物語』の如き田園趣味のものが多い。凭く時代によつて作風の異つてゐるのは、彼の其時の一身上の境遇に支配されたこと、云ふまでもない。

『ヴェニスの商人』は、彼の劇作上の伎倆が正に圓熟の境に入らんとした第二期の作である。人肉の質入と、三種の匣の運だめしと、この二つの古くからある傳説を巧みに自分の畑へ植ゑ付けて、笑ひの裡に涙あり、戀と弱點とを美しくからませた花を咲かせ、面白い喜劇の實を結ばせた處に妙味がある。

この劇は、今に尙ほ東西の舞臺に上されて、常に喝采を以て迎へられてゐる。近く東京の舞臺でも、文藝協會や、左團次一座や、ウ・ルキー一座や、京濱の外人のアマチュアの團體などで演ぜられたことがある。

私の譯述は如何にも拙い。あたらしこの不朽の文字を汚して、原作の妙味を傷つた罪は、地下の大文豪に對しても、また讀者諸君に對して、ひたすらわび入るの外はありません。

脚 者

ヴェニス商人 (Merchant of Venice)

英 國 シークスピア作

一 ヴェニス市。街 頭

以太利國ヴェニスの市に、アントニオと云ふ貿易商があつた。温厚な若い紳士で、飽くまで禮節を守つて自分を慎しみ、他人に對しては何處までも親切を盡す、商人ながらも羅馬の古武士を見るやうな佛があつたので、市民の誰れも彼れも、此男を尊敬せぬものはなかつた。

ソラニオだの、サラリノだの、グレシャノだの、ロレンゾだの、アントニオに心服してゐる仲の好い若い紳士は澤山あつたが、中にも隔てなく互ひ

の心をゆるし合つたのはパッサニオであつた。パッサニオは眉目清秀の風流才子であつた。貴族の家に生れて少しばかりの遺産はあつたけれど、若い人の誰れでもやり勝ちな華美な遊びに耽溺して、多くもあらぬ財産は何時の間にか湯水のやうに蕩盡して了つた。残るは負債ばかりで、金に困るとアントニオの許へ駆け付けて来ては「どうかしてくれないか。」と云ふのが常であつた。アントニオは一度も厭な顔をしたことがない。心持よく何時でも其窮乏を救つてやつてゐた。憐れした兩人の交情は、躰こそ別々に二つ有つてゐるが、事實に於て、心も一つ、財布も一つと云ふ觀があつた。

それでも、パッサニオは、流石に心の中で濟まないくとは思つて居た。

一日ヴェニス街頭でアントニオに逢つた時、

「君にはこれまで一方ならぬ厄介をかけたね。金銭の上でも、情誼の上でも僕は言葉に盡しがたいほどのお世話を受けてゐる。つまりは、僕が身分不相

應な贅澤を盡した爲にこんな惨めなさまになつたのだから、誰れを怨まうやうもない。僕は自分で何うにかして、無駄費ひのためにこさへたこの大穴を埋めなければならぬ。それに就いて、君に是非打明けて話さなければならぬことがあるのだが。」と、眞摯な顔をして云つた。

「承りませう。無論まじめなお話だとは思つてゐますが、事と品とによつたら、私の財産と私の骨折の一切を擧げて、あなたの御力にならうぢやありませんか。」と、アントニオは何時もながら頼もしい。

パッサニオが今度思ひ立つた負債償却の計畫を成就するについて、矢張り先き立つものは金であつた。アントニオに對して又々金を貸してくれと頼むのは遠がに氣はづかしくて云ひ出し難い。最初は遠廻しに持つて行つたが、遂々思ひ切つて、

「實はあのベルモントと云ふ處に、父親もない又母親もない、たゞ一人ほつ

ちで莫大な遺産を有つてゐる若い氣高い姫様があるのだ。姿も心も世に優れて美しい。何と形容して褒めていゝのかわからないくらいに立派な婦人なのだ。僕は一度訪問して、無言の裡に情の秋波を受けたことがある。その姫様は名をボオシヤと云つてね、彼の羅馬の名士ケートーの娘からブルータスの妻になつた同じ名前のボオシヤに比べて、優るとも劣りはすまいと思はれるほどの才色双美の淑女なのだ。その評判は早くから世界中に廣まつてね、津々浦々から風のまにまに焦がれ寄る貴公子の数はね、幾十人、幾百人と算へられないと云ふ話だ。實に大したものではないか。アントニオ君。その姫様が僕の手に入るのだぜ。僕に其貴公子等と拮抗するだけの資力さへあつたらば見事三國一の婚がねとなつて見せる自信を有つてゐるのだけれど……』と口ごもりながら語るのであつた。

「宜しうございます。」とアントニオは快く頷いて、

「あなたも御承知の通り、私の財産と云ふ財産は、残らず海の上にあるのです。船が歸つてまゐらないとお金が入りません。今が今直ぐにと云つて御用に立つ金は此處にはなし、またお金に換ふべき品物も此處にはありません。けれど、まだ幸に信用と云ふものを有つて居ます。ヴェニス市でどれ位私の信用がお役に立ちますか、まあお金の工面にかゝつて見ませう。ボオシヤ姫のお婚様の候補者として、あなたがベルモントへ打つて御出になられるだけの軍資金は屹度調達して差上げますから、あなたも早くお出掛けになつて金を貸しさうな男を御探ねなすつて下さい。私も心當りの箇所を聞いて見ますから。」と、アントニオはバツサニオと別れるや直ちに金子の調達に取りかゝつた。

II ベルモント。ボオシヤ邸の一室

立派な邸に住まつて、財寶はあり餘るほどにある。彼女は其家の美しい若い女主として、言ひ寄るものは数へきれないほどであつた。世にボオシヤ姫のやうな果報な女がまたとあらうか。

けれど、世の中のこととは何から何までさう思ふ通りにはならないものである。ボオシヤ姫が侍女のネリツサに向つて、

『ねえ、ネリツサや。わたしの此小さな軀一つを、廣い世界に置き處がないといふのは、何と云ふ因果な身の上だらうねえ。わたし、もう浮世が厭になつちまつたの。』と、つくづく嘆息を洩らしたところを聞くと、この幸運なお姫様にも、容易ならぬ苦勞の種があるのだと見える。

その苦勞と云ふのは、怨うなのである。

姫の父が此世を去る時、黄金と銀と鉛との三種の手匠を作らせた。その手匠の一つには格言めいたものを書いてある。而して其中のどれか一つ

に、ボオシヤ姫の肖像を入れてあつた。

『お前の肖像の入つてゐる匠を選び中てたものを、お前は婚と定めなければならぬ。』——これが父の遺言であつた。ボオシヤ姫の運命はこの三つの手匠の一つに握られてゐるのだ。言ひ寄る數多の貴公子や若い紳士達の中には、姫の氣に入つた男もあらう。虫の好かない男もあらう。而かもそれが彼女の意志のまゝにはならないのであつた。

『わたしは好いたと思ふ人を良人を選ぶことも出来なければ、また厭やだと思ふ人を拒むことも出来ないの。わたしの將來は、亡くなつた阿父さまの仰せ一つに縛られてゐるのですもの。あゝ、つまらない、つまらない。』とまた愚痴をこぼす。

侍女のネリツサは氣の毒さうに、

『そんなにくよくよくお思ひ遊ばすな。お尊父さまはあんなおえらい方でござ

いましたから、決して姫様の爲悪しかれとて、こんな御遺言をなさらう筈は
 ございませぬ。眞實にあの御運定めの際をお中て遊ばすほどの方ならば、屹度
 心から姫様を御大事に遊ばす立派な男に相違ありませんよ。御安心遊ばせ。
 わたくしが保証いたします。」と慰めて、「それはさうと、是れまでまゐりまし
 た數多の殿方の中で、どなたか、姫様のお氣に召した方はございませぬので
 すか。」と質いた。

「さうねえ。まア一人く名前を云つて見ておくれ。」

ネリツサは愈よボオシヤ姫の意中を探しにかゝつた。

「では、先づ第一番に、あのネーブルスの殿様は、何う思召していらつしや
 います。」

「あの方は、まるで野馬のやうだわ。」

「では、バラタインの伯爵様は。」

「あの方は、いつでも苦虫を噛み潰したやうなお顔をしてばかり在らつしや
 るのだもの。」

「では、あの佛蘭西の貴族さまのルボン様は。」

「あれでも人間なのかしらと思つてよ。人様の悪口を申しては濟まないけれ
 ど、あの方はまた格別ですもの。」

「では、英吉利の男爵さまのフォコンブリッヂ様は。」

「あの方は、英吉利の言葉の外は何處の國の言葉もお話しなさらないし、わ
 たしは又、英吉利語と云つては、些つとも話せないのだし、言語の通じない
 啞同士の寄合では、お話しにもなりはしないわ。」

それでは、蘇格蘭の殿さまは、日耳曼の若殿は、と、ネリツサは次ぎく
 に其名を挙げて見たが、一人としてボオシヤ姫の氣に入つた男はなかつた。
 この好かない貴公子達の中の誰れか、若しも運試めしの匣を首尾よく選

び當て、婿君たる資格を得たら何としやう……これがボオシヤ姫の胸に蟠る苦勞の一つであつた。が、それでも幸運なことには、ネリツサから慫う云ふ報告があつた。

「姫さま。御安心あそばせ。只今申上げました殿がたは、縁談の申込みを御轍回遊ばして、皆さま御國へお引取りになるさうでございますから。」

ボオシヤ姫は先づ片荷だけは重荷を下したやうな心持になつた。

それにしても、折角縁談を申込んで置きながら、手匣の運試しにもかゝらない前に、此人達は何故空しく引返して行かうとするのだらう。

ボオシヤ姫の花婿たる資格を得んが爲には、三つの手匣の中から一つを選びあてなければならぬ——たゞそれだけのことならば、誰れも二の足を踏む人のあるべき筈はないが、その運試しをする前に當つて、固く誓約しなければならぬ三つの條件があつた。その一つは、匣の秘密を何人にも口外せぬと

云ふ事。その第二は、若し匣を選び損つた場合、その男は以後如何なる婦人にも結婚を申込まぬと云ふ事。それから第三は選りそこなつたら直ぐに此處を立ち去ると云ふ事。この三つの条件の中でも、第二の条件が實は男子に取つて重大問題であつた。この運試しの成功すれば仕合はせだけれど、失敗したら最後、その人は一生獨身を守らなければならないことになるのだ。それがつらい、それが馬鹿らしいと云ふので、この若い貴公子達は、はるくあこがれて来た美しい花を、見すく手折りも得せて、悄悄と引かへして行くのであつた。

「それでこそ、わたしは何時までも清らかな處女の操を保つことができるのだわ。」と、ボオシヤ姫の喜びは一通りでない。ネリツサは、不圖思ひ出したやうに、

「姫様はまだ覚えていらつしやいませう。ほら、何時ぞや、御尊父さまがま

だ御存生の時分に、モントファラット侯爵と御一緒にいらつしやいました、
ヴェニス、あの若い紳士の方を。」

「あゝ、あの方……たしかパッサニオ様と申したツけ。」とボオシャ姫は容易く當時の記憶を呼び起すことが出来た。さうして、兩人でパッサニオの美しい立派な人品を褒め合つてゐる處へ、

「六人の殿方様が、お國へお歸りになる御告別を、姫様に申上けたいと仰やつておいでになりました。それから今度は七番目のお客様、モロッコの若い殿さまが、今夜お邸へお着きになると云ふ先觸れのお使が参りました。」と、召使の男が知らせに來た。

六人の求婚者が、あきらめて國へ歸ると云ふのは嬉しいけれど、また一人の求婚者があらはれて來たと云ふのは氣が、りであつた。モロッコと云へば色の黒さも思いやられる。苦勞の種がまた一つ、ボオシャ姫の胸の奥に芽ぐ

んで來た。

三 ヴェニス市。街頭

パッサニオは、友人アントニオの信用を當に金を貸して呉れさうな相手をあれか是れかと物色した末、猶太人の金貸シャイロックと云ふ男を捉へて話を持ち込んだ。

「どうだい、猶太人。三ヶ月の期限で三千兩だけ貸して呉れないか。アントニオが借務者になつてお前に證書を入れるのだが。」

シャイロックは三千兩と聞いた時、誰れがお前達のやうな者にそんな大金を貸す間拔があるものかと、鼻の先であしらう氣で居たのであるが、アントニオが義務を負ふのだと云ふ一言を聞くと共に、何かしら胸に鋭どく響くものがあつた。眼の色が怪しく光つて來た。唇には恐ろしい劍を藏した笑みさへ

洩らし始めた。

シャイロックは、アントニオに對して抑へ難い怨みと憤りとを有つてゐた。これ迄彼かヴェニスの人達に、高い利息で金を貸し付けて懐を温めやうとする、アントニオは何時でも無利息で金子を貸出して猶太人の商賣の邪魔をした。而して數多の商人の集まる市場などで、シャイロックの無情冷酷を罵つて止まなかつた。

「あゝ、何時か一度彼奴の急所をぐつと握ることが出来たなら、仇を取つてやらなくて置くものか。」と、シャイロックは燃ゆるやうな怨みの炎に胸を焦がされて、常住アントニオを咀つてゐた。その待つてゐた時、その復讐の時が今こそ此處に到着したのだと、彼は心の裡で窃かに會心の笑みを洩らしたのであつた。

シャイロックは、さうした心を色にも見せないで、

「アントニオさんなら立派な紳士です。三千兩ぐらゐ用立てゝも心配はなからうと思ひますな。」と、云つてゐる處へ、折よくアントニオが來かゝつたので話は速かに運んだ。心の底に壓へ付けて置かうとは努めて居るものゝ、その袋をつゝき破つて出て來る不平の虫の幾分は如何ともし難いと見えて、シャイロックは、

「あなたは、よく人中で私の事を、やれ邪教徒だの、やれ犬畜生だのと、云ひたい儘の悪口雑言をおつしやいました。まだ其上に、唾を吐きかけたり、足蹴にかけたり、随分ひどい目にお逢はせなすつたのを、よもやお忘れにはならないでせうね。犬畜生に金子がありますかい——とさ云つて了へば話はそれつきりですが、併し私はそんな没義道なことは申しませんよ。これまで背めて下すつた御禮の心持で、三千兩のお金を御用立て申しませうね。」と皮肉をならべた。而して、利息なんかは鏝一文も頂戴しやうと云はないから、後

日の印までほんの冗談に、次のやうな文言の證文を一通書いて貰いたいと云つた。

……萬一期日に至り借用の金子返済相滞り候節は、其科料として小生の身體より肉一斤、貴殿の御隨意に御切取りなされ候共、毛頭異議は申立て間敷候……

この證書の文言を聞いて、先づ驚いたのはパッサニオであつた。

『僕の爲にこんな恐ろしい證書に調印をさせては君に濟まない。僕があきらめさへすれば済むことだから、金子の話はもう中止にして呉れたまへ。』と、傍から止めやうと努めたが、當人のアントニオは驚かない。

『ナニ、心配することはありません。證書の期限の一月前には、貨物をどつさり積んだ私の船が港へ入つて参りますから。』と、軽く受合つて公證人の役場へ證書を認めに行つた。

パッサニオは泣いてアントニオの深切を感謝した。彼は友人の義侠で調達ができた三千兩の金で、天晴れボオシヤ姫の花婿候補者たるに足るべき華々しい支度を整へ、ベルモントに向つて船でヴェニスを出帆した。

同じ遊び仲間の饒舌家のグレシヤノは、何と思つたものか、無理にパッサニオに頼んで、船に乗込んでベルモントへ附いて行つた。

それと同じ晩に、同じ遊び仲間の一人でロレンゾと云ふ若い男は、シャイロックの娘ジェシカを連れ出して、何れへか墮落をして了つた。ジェシカは異教徒ながらも稀なる美人であつた。猶太人の娘に似合はぬ上品な生れつきの女であつた。ロレンゾとは前から深く云ひ交はしてゐたが、シャイロックの監督の下に居ては、どうせ思ふやうにならないのだから、男とひそかに謀し合はせた上、ロレンゾの友達のグレシヤノだの、サラリノだの、ソラニオだ

の、助けを借りて男の小姓の服を着て姿を變へ、父親がバツサニオの出立を祝ふ夜會に出かけた留守を窺ひ、そつと忍んで出たのであつた。

シャイロックが家に歸つて來てからの驚きは、他所の見る目も氣の毒なほどであつた。彼が驚いたのは、たゞ娘の紛失と云ふことのみではない。ジェシカが持つて出た二つの大きな金貨囊と、二つの大切な寶石、その金目なものゝ紛失が彼に取つては何よりの大なる打撃であつた。

「迷子のくゝ娘やアい。大事の金貨をかへせ。大事の寶石を返せ。」と、ヴェニスの街を氣も狂はしう喚いて歩くさまは、笑止にもまたいぢらしいものであつた。

四 ペルモント。ポオシヤ邸の一室

ポオシヤ姫の花婿候補者として、モロッコから縁談を申込みに來た色の黒

い若い殿様は、姫から提出した三つの條件を一も二もなく承諾した。この運試しに失敗したら、二度と何人にも縁談は申込まないと云ふ大層な意氣込みであつた。教會堂で神の御前に誓を立てた上。愈よ手匣を並べた運試しの室へ案内せられることゝなつた。

姫の召使の女が帳をさつと開けると、そこには黄金と銀と鉛と、三種の手匣がならんでゐる。モロッコの殿様は胸の動悸が高く浪打つを覺えた。近く寄つて一々手匣を檢めて見ると、

第一の黄金の手匣の表面には、恠う云ふ銘が刻んである。

「われを選ばんものは、多くの人の望むものを得ん」

第二の銀の手匣には、

「われを選ばんものは、其徳にふさはしきものを得ん」

第三の鉛の手匣には、

「われを選ばんものは、其持てるすべてを他人に與ふるか、たゞしはすべてを嗜せざるべからず」

とあつた。

モロッコの殿様は迷つた。あれか、是れかと、三つの格言めいた文句を色々に解釋して見た末、

「姫を手に入れたと言ふのは、世界中の男の希望である。多くの人の望むものとは云ふまでもなくボオシヤ姫のことを云つたものに違ひない。すると黄金の匣の文句が一等意味を爲して居るやうだ。——われを選ばんものは、多くの人の望むものを得ん——黄金の匣を選んだものは、萬人の望む姫を手に入れることが出来る」と云ふ謎に違ひない。さうださうだ。」

姫から鍵を受取つて、彼は希望に充たされた心で黄金の手匣を開いた。そこに在るべき管のボオシヤ姫の肖像は見えずして、中には一個の獨體があつ

た。そのうつろになつた眼窩の中には、一枚の巻き紙をはさんであつた。而してそれには、

「光りのあるものが悉く黄金だと思つたら間違つてゐる。外面の色にだまされて迷ふ奴は馬鹿だ」

と云ふ意味の文句が書いてあつた。モロッコの若い殿さまは、落膽して歸つて行つてしまつた。

次にあらはれた求婚者はアラゴンの若い殿さまである。彼は三種の手匣の中、「われを選ばんものは、その徳にふさはしきものを得ん」とある銀の匣を選んだ。彼は果してボオシヤ姫を妻にするに相應しいだけの徳を有つて居たのであらうか。先づ匣の中を見よ、

匣の中には此若い殿様にふさはしい馬鹿男の姿繪が入つてゐた。馬鹿男は

手に巻物を捧げてゐた。それを讀んで見ると、

「世には銀で外面を包んだ馬鹿者が居る。この匣の中に居る奴は即ち其仲間だ。この銀の匣でさへ、七たびも火で鍛へたものだ。お前の智恵のかゞみでは、もつとく鍛ひあけた上でないと、立派なお嫁さんを探し當てることは難かしいよ」

と云ふ意味の文句が書いてあつた。

「馬鹿面さけて來た俺が、また一つ馬鹿を土産に持つて歸るのか。あゝ、つまらない、く〜。」と、アラゴンの若い殿様は魂のぬけたやうな馬鹿面をさけて歸つて行つた。

ポオシヤ姫も、侍女のネリツサも、こんな好かない人達に運が向いて行かなかつたのをひどく喜んだ。

「ネリツサや、はやく帳を下してお置き。」と、姫が命じて居る處へ、鄭重な

先觸れの使者を立て、目覺ましい立派な贈物を持たせて、ヴェニスの風流男バツサニオが、馬上ゆたかに華々しく乗込んで來た。

五 ペルモンント。ポオシヤ邸の一室

バツサニオは、ポオシヤ姫の父親がまだ生存してゐる時分に、曾てこのペルモンントに來たことがあつた。ポオシヤ姫も侍女のネリツサも、この若い氣の利いた麗はしい男のことは、いまだに記憶に留めてゐる。この間も、「立派な方だ。」と兩人で噂し合つたほどであつた。そのバツサニオが花婚の候補者として乗込んで來たのである。姫や侍女の待遇は、これまでの求婚者に對するのと全然異つてゐた。何時までも此邸に足を留めて、何時までも楽しく暮してゐて欲しいと、あらん限りの心をこめて歡待をするのであつた。

バツサニオに取つても其歡待は嬉しかつた。けれど、きまる物がちやんと

定つて了はないうちは、何だか心に不安な曇がある。物足りない氣がしてならぬ。この美しい姫を妻と呼んで、全然自分のものにして着るものか、出來ないものか、彼の三つの手匣が運命の鍵を握つてゐると云ふなら、はやく之を選び中てたいものである。失敗すれば男らしく引退るまでだと、彼は自から進んで運試しの室に入らうとした。

ボオシヤ姫はそれを引留めて、

「まア、あなた、せめて一兩日御猶豫遊ばしても宜しいではありませんか。うまくお中て遊ばすと嬉しいのですけれど、若しか外れました場合には、妾とあなたとは永久にお別れしなければなりません。それが厭！ 妾何時までも慫うしてあなたと一緒に居たいのですもの。ならうことなら、一月でも、二月でもお引留め申して、御運試しの時を延ばさせたいのが、妾の希望なのですから。」と、心配さうに男の顔を見た。パッサニオは、

「でも、此儘で居ました日には、生きるものか死ぬるものか、まるで拷問臺にでもかけられてゐるやうな心持がしてなりません。どうか早く匣を開くことを御許し下さい。」とあせる。

「では致し方がありません。この三つ並んだ匣の一つに、妾の肖像が入つてゐますのですから、どうかそれをお中て下さいませよ。眞實心底から貴郎が妾を愛して下さいますならば、屹度中るに違ひないと思ひますわ。」

姫は何卒中りますやうにと自分でも心に念じてゐた。大切な男の運試しの判断の邪魔にならないやうにと、侍女や數多の召使の者を残らず遠ざけ、樂師に命じて妙なる音樂を奏せしめた。

パッサニオは手匣の前に立つた。音樂の調べはゆるやかに流れてゐる。その歌の中に、「目の迷ひから浮氣な心が起る」と云つたやうな意味の文句があつた。それを耳に留めたパッサニオは、

「その通りだ。目を欺かんとする外観ばかりのものは全く當てにはならない。俺は燦爛たる黄金の光に迷はされてはならないぞ。お前には用はない。色の生白い銀の匣、これも俺には用がない。俺にはこの飾りつけのない鉛の方が氣に入つた。俺はこれを取らう。」と、鉛の手匣に手を掛けた。

吐く息も引く息も絶えて了ひはしないかと思はるゝまでに、ちつとパッサニオの一舉一動を見入つて自分の運命の分るゝ處を案じてゐたボオシヤ姫は始めて唾を呑み下して、ホツと胸を撫でおろした。

パッサニオは、今こそ運命の定まる處だと、靜かに鉛の手匣の蓋を開けた。嬉しや中には美しいボオシヤ姫の肖像が入つてゐた。而かも其繪は言葉では形容し盡せぬほど見事に出来て居た。その眼、その瞳、その唇、その頭髮、その一つくりに就て、パッサニオは獨り言のやうに最上の讚辭を呈した末、振りかへつて本物のボオシヤ姫と見くらべて、

「やつ、本尊の美しさは又一しほだ。俺のあらゆる形容詞を盡しても、此畫の美しい處を頌へ盡すことは出来ないと思つたのに、また本尊を拜むと、それ以上だ。此の畫なんざでんで比べものにならないや。」と又今更のやうに姫の美に恍惚となるのであつた。

匣の中には、姫の肖像の他に、なほ一卷の書いたものがあつた。それは、「お前は外觀の美に迷はなかつたから、慙うした幸運を得たのだ。もう是れで不足を云つてはならないぞ。氣を移してはならないぞ。さ、姫はお前の妻だ。愛の接吻をするがい。」

と云ふ意味の文句であつた。パッサニオは突如進み寄つてボオシヤ姫に接吻した。麗はしい男と美しい女と、兩人の運命は互ひに望んで居た通りに結び付けられてしまつたのである。

パッサニオは夢のやうな心持であつた。

「ほんとに、あなたは私の妻になつたのでせうか。」と云ふと娘は、
 「その御懸念には及びません。今から妾の躰はあなたのものです。あなたの御命令なされることならば、わたくしは如何なる事でも服従いたします。妾は今この今まで此邸の主人でございました。この數ある家來共の主人でございました。而して自分自身の主人でございました。けれど、只今からは、この邸もこの家來共も、それから妾の身も、残らずあなたの所有品となつたのでございますよ。その引渡ししるしとして、わたくしのこの指環を差上げます。この指輪は兩人の縁を結ぶ大切な品でございますよ。萬一あなたが此指環をおなくし遊ばすやうなことがありましたら、妾はあなたの心が變つた兆候だと思ひますよ。さうお思ひ遊ばして大事になすつて下さいまし。」と念を押した。パッサニオは、

「たしかに頂きました。若しか、この指環が私の指から離れるやうなことが

ありましたら、それは私の生命が絶えてしまふ時です。このパッサニオが此世に亡くなつた時だと思つて下さつて宜しいのです。」と、固く約束を結んだ。こゝに美しい新郎と新婦が出来たと同時に、パッサニオに附いて來たグレシヤノと、ボオシヤ姫の侍女ネリツサと、この兩人の間にも婚約が成立つて共に主人から夫婦となることを許された。ボオシヤ家には、歡びの光り、喜びの聲が一ぱいに光ちわたつて、たゞもう芽出たいくゞで踊り狂うてゐた。いつの間にか冷たい不安の魔風が、門の入口まで吹き寄せて來てゐるとは、誰れ一人思ひまふけてゐる者もなかつた。

歡樂の酒に溶けて流れてゐる甘い空気を、突如に掻き亂したのはヴェニスからの使者であつた。パッサニオの遊び仲間のソラニオは、アントニオから頼まれて、パッサニオに宛てた急ぎの書狀を持つて來たのである。

パッサニオは其書狀の封を切つて讀み下すと共に、今まで美しい色に輝いてゐた顔の色が、忽ち死んだ人のやうに蒼白になつてしまつた。可愛い戀人の立つてゐる前でなかつたら、危く失神して仆れて了ふ處であつたのだ。慙くと見て取つたボオシヤは、わが大切な良人の一大事、あの書狀の中には容易ならぬ事件が包まれて居るに違ひないと感じた。

『こんなことを申上げますと、煩さい奴だと思召すかは存じませんが、妾はあなたの妻なのですから、あなたの御心配は、矢張りあたくしの心配でございます。その御手紙にどんな事が書いてありますか存じませんが、せめて御心配の半分だけは、私にも分けて頂きたいものだと思ひます。』

パッサニオも其眞のこもつた愛情を嬉しく思つて、アントニオから來た書狀をボオシヤに示した。

……小生所有の船舶は不幸にして悉く難破致し候、小生が義務を負へる

債權者は督促苛酷を極め進退全く谷まり候、シャイロックに對する借用金の期限は既に経過し、其證書の契約に従ふ時は、最早小生の生命は亡きものとあきらむる外は無之候、最後の際に只一目貴下の尊顔を拜するを得ば光榮これに過ぎず候……

と云ふのが其書狀の文言の大要であつた。そこで、ボオシヤは、パッサニオとアントニオとの關係を尋ねた。パッサニオは恥かしい彼の借金の秘密を残らずこの新しい妻に打明けた。

『私は最初あなたに打明けた通り、財産としては無一物の、裸一貫の紳士に過ぎないのです。いや、實を云ふと、それ以下の人間だつたのです。今度こちらへ乗り込んで來る費用に窮したところから、親友のアントニオに金子の調達を頼むと、彼は快く三千兩と云ふ金を平常仇敵のやうに睨み合つてゐる猶太人から借りて呉れたのです。その借用證には、萬一期限になつて返済が出

來なかつた場合には、アントニオの體から肉一斤を切つて取ると云ふ恐ろしい契約が載せてあります。その時シャイロックは、ほんの冗談に恚う書いて置いて貰ふのだと云つたが、その實、日頃怨みに思つてゐるアントニオを深い穴へ陥入れる企圖だつたらしいのです。アントニオだつて、まさか奴の底意を知らなかつた譯でもなかつたでせうけれど。あの男には期限の一月前には自分の持船が港へ入ると云ふ自信が十分にあつたのです。處が其持船が残らず難破して了つたとは。何と云ふ不幸なことでせう。私は、あの深切な、心の氣高い男を見すく殺すことは出来ない。あゝ、どうすればいいのでせう』と身をもがいた。ボオシヤは決心の色を面にあらはして、

「あなた、一刻も御猶豫遊ばすところではありませんよ。これから直ぐにヴェニスへ御出立遊ばすが宜しからうと存じます。猶人から借りた三千兩のお金は六千兩にしてお返しなすつたら、よもや不服は申立てますまい。それでも

聽かぬと申しましたら、六千兩を二倍にでも三倍にでもしてお返し遊ばせ、そんな貴い御親友の髪の毛一筋でも、あなたの爲に損はれたとあつては申譯がありません。そればかりの端金は、二十倍にでもしてお返し遊ばす御用意をなすつて、はやくヴェニスへ御出立なさいまし。さうして綺麗にお拂ひを済ませた上で、その御親友を此方へお伴れなさいまし。」と健氣にも勵まし勤むるのであつた。パッサニオは妻の好意を心から深く謝し、グレシヤノ等を伴つてヴェニスに向つて出發した。

六 ヴェニス市法 廷

こゝはヴェニスの法廷である。けふは恐ろしい審問の開かれる日である。壇上一段高き處に坐を構へて、柔しい眼で見下して居る白い鬚の美しい氣高い人はヴェニス太公である。その左右にズラリと居並んでゐるのは、議官

の職に在る貴族達である。

壇の下なる右手の方には、被告アントニオが觀念の眼を閉ぢて控へてゐる。それより少しく引下つて、ボオシヤ姫の婚となつたパッサニオが、原告に支拂ふべき多額な紙幣を川意して、裁判の局は如何に結ばれることだかと、心配な顔をして立つてゐる。

壇の下左の方には、グレシヤノだの、サラリノだのを始めとして、何れもアントニオやパッサニオと中よしの人々、その他ヴェニスの市民の主なる人々と、今被告の頭の上に墜ちかゝつて居る大きな岩石が、自分達の頭の上にも同じやうに墜ちかゝつて來てゐるやうな心持で、曇つた顔色をして立つて居る。看守ども、首を俛垂れて控へて居る。愁ひの雲はこの法廷の空氣を重く重く沈ませて、不安の念はすべての胸の動悸を、高く高く浪打たせてゐるのであつた。

「アントニオは出廷したか。」と、太公は徐かに壇の下をも見渡した。

「はい、こゝに控へて居ります。」と、アントニオは落付きのある聲で答へた。

「今日其方の對手に立つ原告は、心木石のやうな人非人ぢや。慈悲だとか情だとか、そんな優しい心持を徹塵も知らぬ男ぢや。わしは其方が可哀想でならぬ。」と、太公は情深き言葉をかけて被告をいたはつた。

「承はりますれば、殿さまは彼の男の冷酷な心を和らげやうと、色々に御諭し下さいましたさうで、私は御禮の申上げやうもございませぬ。併しあゝして飽くまでも證書面通りにおさばきが願ひたいと主張します以上は、法律の面から申しましても、彼奴の良を免れることは出来ませぬ。私は、もう何うにでも成るやうになれと、疾くに覺悟をきめてゐるのでございます。」と、アントニオは悪びれた色もない。

太公は看守に向つて、猶太人シャイロックを呼び入れいと命じた。やがて原

告たるシャイロックは憎々しいほど得意の色を面に漲らして法廷にあらはれた。

『もつと前へ出い。』と太公は命じた。シャイロックは、被告アントニオと向ひ合つて、壇の下の左の方に進み出た。

太公は温顔をシャイロックの方に向けて、

『シャイロック！ 其方は一つ世間の人々を驚かしてやらうと云ふ考へから、肚の裏で面白い狂言を書いて居るのではないか。世間の人は皆そんな噂をしてゐるのだ。わしも亦さうだと思つてゐる。其方は何處までも頑固に意地ばつて一同を困らせて置いて、さて彌々と云ふ間際になつて忽ち慈愛の本性をあらはし、まア、猶人はさうした心であつたのかと、皆をわつと云はせる趣向であらう。さうして、アントニオに對して喧ましく請求して居たあの肉一斤の料金を免除するばかりか、貸した元金も半分に負けてやらうと云ふ心底

で居るのだらう。わしは確かにさうだと思つて居る。アントニオの身に降りかゝつた此頃の續く不幸は、其方もよく知る通りぢや。たとへ鐵、石のやうな心をもつた無慈悲な鬼どもでも、あの男を氣の毒だと思はぬ者は一人もあるまいと思ふ。どうぢや、シャイロック、焦らさずに早く優しい返答を聞かせて呉れては。』と、わざと遠廻しに冷酷な猶太人の心を動かさうと試みた。けれどシャイロックは、そんな情に訴へた言葉に動かされて、復讐の念をひるがへしてしまふやうな男ではなかつた。彼は太公の面を見上げて恐るゝ色もなく、

『私の決心は既にこの間も申上げた通りでございます。證書の文面にある通りの料金を受取りますと神様にまで誓詞をかけましたから、もう何うしても動かすことは出来ません。それを殿様が兎や角と仰やいます日には、このヴェニス市には法律も自由もないことになつて了ひます。こんな事を申上げま

すと、或は殿様には、三千兩の金を受取らずに、腐つた人間の肉一斤を欲しがつて何の役に立つかとの御不審もございませうが、それは私がさうしたいからさうするので、その理由の説明は致しかねます……イヤ實を申しますと私はアントニオに對して深い怨みがございます。あの男ほど私が蟲の好きな奴はございません。私が慫うして勘定に合はない訴訟を致しましたのも、その邊の事情を御酌み取り下さいましたら、お解りになりませうかと思ひますが。」と、氣味のわるい笑みを洩らした。

アントニオの後に立つてゐたバッサニオは聞きかねて前に進み出た。

「それが貴様の残忍極まる訴訟の答辯になると思つてゐるのか。この冷血動物めが。」

罵られてもシャイロックは平氣であつた。蚊に螫されたほどにも思つては居なかつた。

「あなたの口をお出しなさる幕ぢやない。私はあなたに答辯する義務を持ちません。」と、顔を背ける憎々しさに、バッサニオは躍起となつて、

「蟲が好かんから肉を切つて取ると貴様は云つたな。そんな無法なことが出来ると思ふか。」と、詰め寄つた。

シャイロックは顔を背けた儘で、

「憎いから殺してやらうと思ふのさ。」と空嘯いて居る。

「蟲が好かないのと、憎いのは譯が違ふのではないか。」と追究した。

「二度まで蝮に咬まれてたまるものか。」と、シャイロックは飽くまで落付き澄ましたものだ。

「何をッ。」と、劔の握に手をかけて、バッサニオが尙も詰め寄らうとするのを、

「まあ、お待ちなさい。」と、アントニオは押し止めて、

「相手は猶太人ぢやありませんか。こんな男を相手にして争ふのは、海の岸に立つて、寄せ来る高浪に退れと命ずるのも同じ事です。森の中の狼を捕へて、何故子羊を盗んで行つたかと詰るのも同じ事です。尾上の松に向つて、何故さう颯々と風の音を立てるかと理窟を云ふのも同じ事です。凡そ世の中に猶太人の心ほど因業なものはありません。この男を説き諭してその心を柔けやうなぞとは、元來出来ない相談です。どうか、もう何にも仰やつて下さいますな。私は早く裁判を受けて、シャイロックの思ひ通りにならうと思ひます」と、自分の覺悟を打明けてバツサニオをなだめた。

バツサニオも猶太人と争ふの益なきことを悟つた。そこで彼は用意の貨幣囊を持出してシャイロックに突きつけながら、

「お前に借りた金は三千兩だつたな。それを此通り六千兩にして返すが何うだ。」と怒と相談の歩を進めたが、

「六千兩の金が六倍になつてかへつて來ても、私は受取る氣はありません。書面にある抵當の品を受取りたいのが希望です。」と、シャイロックは頑として應じなかつた。

ヴェニス太公は見るに見兼ねて、

「其方だつて他人に憐愍を乞はねばならぬ場合が來ないとも限らぬのではな
いか。平常慈悲を施して置かないものは、天の恵みを蒙ることも覺束ないぞ」と、物の道理を説いて聞かせたけれどシャイロックは、てんで耳にも入れない。
「私は悪いことをした覺えがありません。心に疚しいことのない者は、神様も天道様も恐しいとは思ひません。これは物のたとへを申上るのですが、殿様の御邸には、數多の奴隸を買つて御使ひになつて在らせられませう。あなた方はこの奴隸を、驢馬か犬猫でも遇かふやうに、随分酷くお使ひなされるのではございませんか。それと云ふのも、金子を出してお買ひになつた品物

だからであります。それを私共が殿様に向ひまして、あの奴隷どもを早く自由にして姫様のお婚様になさいましと、申上げましたら何う遊ばします。あんなに虐待するのは可哀相だ、彼奴等の寝る所も貴所方と同じやうに柔かなのにして、彼奴等の口にするものも、何故あなた方と同じやうに美味しいものを喰べさせてお遣りなさいませんか、申上げましたら、何う遊ばします。殿様はきつと慙う仰やるでございませう。「彼奴等はわしの所有物ぢや」と。私のお答へ申上る所も矢張り其通りでございませう。私の要求する肉一斤は、値段の高いお金を拂つて手に入れた私の所有物です。これを頂戴したいと申しますのに何も不思議はありません。それでもいけないと仰やるなら、法律も何もあつたものではない。このヴェニスの市は闇も同然でございませう。是非とも裁判を進めて戴きたいと思ひますが、如何なものでございませう。」と、猶太人は猶太人らしい理窟を云ふのであつた。太公はきつ

となつて、

「この裁判を進行させやうと、中止させやうと、それはわしの権限内にあることぢや。併し、かねて招いて置いたベラリオ博士が、もう程なく見える筈ぢや。それまで待つことにせう。」と云ふ。ところへ、法律家の書記の服装をした若い男が、ベラリオ博士の書状を持って出頭した。太公、

「あなたは、博士からのお使者か。」

「左様でございませう。ベラリオから宜しく申上げるやうにとのこととでございませう。」と答へながら、書記は書状を太公に呈した。

シャイロックは胡坐をかいて、腰にはさんだ庖丁を取り出して、靴の裏でゆるく砥ぎはじめた。

パッサニオは又癩にさはつて堪らない。

「おい、なぜ貴様は庖丁などを磨ぎ始めるんだ。」と、答めると、

「そこに居る破産の男から、抵当流れの肉を切取る爲でさア。」と、シャイロックは態と音を立て、磨ぐのである。

グレシヤノも堪りかねて、

「ヤイ猶太人、貴様の心はまるで石のやうだな。その庖丁を靴の底で磨ぐよ
りか、貴様のその冷酷な心の砥石で磨いた方が、よつほど切味がよからうぜ
どんなに切れる刀だつて、どんな鋭利な人斬庖丁だつて、貴様が心に持つて
ゐる邪見の刀にはかなはないからな。こんなに皆で云つてるのが。貴様の胸
には通じないのか。」と、氣を揉んだ。

「お前なんかの子僧の言ふことが、なんで私の胸に響くもんかい。」と、シャイ
ロックは、相手を宛然子供あつかひにしてゐる。

「何だと、畜生めツ（とグレシヤノは赫となつて）貴様のやうな奴が、恚うし
て、此國に生きて居られるのが、不思議だと俺は思つて居るのだぞ。貴様は

人間ぢやない。下等な動物の魂が貴様のお袋の胎内に宿つて、それから此世
へおぎやアと生れて來たのが貴様だつたのだらう。血に飢ゑてがつくして
ゐる處は、まるで狼だ。」と罵倒したが、シャイロックは、

「何とでも云ふがいよ。お前がそんなに嗜いたところで、この證書に捺し
た印形が消えてなくなると云ふではなし、あつたら口に風邪ひかすばかりだ
なア子僧さん、そんな隙があるなら今のうちに智恵袋でも繕つて置いた方が
遙かに優だらうぜ。わしは裁判が済むまで金輪在動くことぢやない。」と、庖
丁の切尖を鼻先へ突き出して眺めて居る。

ペラリオ博士からヴェニス太公へ宛てた書状には、「殿様から御書面を頂き
ました時分、生憎私は重き病氣で臥せつて居りました。併し、丁度幸なこと
には、その時羅馬からバルサザールと申す若い博士が私を訪問の爲に参り合

はせて居りました。私は今度の猶太人と貿易商アントニオとの間に起つた訴訟事件を委しく此博士に説いて聞かせ、兩人して種々必要書類を調査した上私の意見は残らず博士に述べて置きました。この博士はまことに珍らしい博學の人で、何と申していゝのか、賞める言葉もない位です。萬事は此博士に委任して、私の代理として法廷へ出頭さすことに致しました。齡が若いからと申して、決して御輕蔑なさらぬやうに願ひます。若いに似合はぬ老熟した頭腦は、試みに裁判の局に當らせて御覽になりましたら直ぐおわかりになりませう。それは、私が讀めて申上げます以上のえらい伎倆を持つてゐるのでございますから。」と云ふ意味の推薦の辭が認めてあつた。

「その博士は何處に。」と訊くと、若い書記は、

「直ぐ彼方に控へて居ります。」と答へた。

太公は三四人の看守に命じて、博士を鄭重に案内させ、その間に件の書狀

の文面を、書記をして一同に讀み聞かさせた。

案内に連れて、法學博士の服裝をしたバルサザールは法廷に入つて來た。

まだ少年のやうな、若い美しい博士である。

太公は「先づ此方へ。」と會釋して壇上の席に請じた。博士は判官の席に着いた。いよく是れがら世に珍らしい訴訟事件の審問は始まるのである。滿廷は色めきわたつた。

博士は壇上より、被告席、原告席、バツサニオからグレシヤノの居るあたりまで一わたりズツと見おろして、太公に向ひ、

「商人と、猶太人とは何處に控へて居ります。」と質いた。

太公は、アントニオとシャイロックとに、兩人共前へ出よと命じた。兩人は少しく前へ進み出て、博士に一禮した。

博士は先づ猶太人の方に向つて。

「シャイロックとは其方か。」と訊いた。

「はい、私がシャイロックでございます。」と答へた。博士は、

「其方が今回提起した訴訟は、實に奇怪至極な事件ぢや。併し手續は凡て正當に履行されて居るから、ヴェニス法律の面から見て、何處も批難の打ち處はない。」と認定を與へる。

シャイロックは心で頷いて、さうあるべき筈だと云つたやうな顔をして居た。博士は次にアントニオの方に面を向けて、

「其方の生命は、活かさうと殺さうと、全く猶太人の手の中に握られてゐるのだな。」と訊く。

「原告は、さう主張して居ります。」と、アントニオは答へた。

「この證書の文面に異議はないか。」

「ありません。」

「では更めてシャイロックに忠告するが(と博士は體を下手の方にねぢ向けて)其方は被告に對して慈悲をかけてやらなければならぬぞ。」と優しい聲で云ふ。

「何故、なぜ慈悲をかけてやらなければならぬのです。さ、その理由を承はりませう。」と、シャイロックは血相變へて、上眼づかひにぢつと博士の顔を見た。

「いや、慈悲と云ふものはそんな理窟づくめのものではない。(と博士は落着いた態度で)音もなくしめやかに降る春の雨が、おのづと土を潤ほすやうなのが、眞實の人間の慈悲と云ふものぢや。慈悲は施すものも幸なれば、また受けるものも幸ぢや。即ち二重の功德があるのぢや。」

シャイロックは、心に満たぬ色を面に浮べてゐた。博士は續けて、

「其方が此度の訴訟は、つまり證書面の契約によつて、理非曲直を糺して欲

しいと云ふのであらう。』

シャイロックは首肯づいた。博士はなほ續けて、

「ところが、人間と云ふものは罪の深いものぢや。其方の主張するやうにさう理窟一方で裁判をして行つた日には、只の一人として救はるゝ者はあるまいと思ふのぢや。そこで、人間は神に向つて只管慈悲を祈らなければならぬ。既に慈悲を祈る以上は、自分も亦他人に慈悲を施さなくてはならない道理ぢや。其方はさうは思はぬか。」と顔色を窺ふ。

シャイロックは、また不満な色を面に浮べた。博士は何處までも優しく、

「慙うして口の酢つばくなるほど慈悲の功德を説いて聞かせるのも、理窟づくめの其方の訴訟を、何とかして穩かに解決したいと思ふからぢや。併し、其方が、何處までも主張を徹さなければならぬと云ふ決心ならば致方がない神聖なるヴェニスのは法廷は、據なく被告に對して殘酷なる宣言を下なさけれ

ばならぬ。」と云ふ。

シャイロックは、自分の目的とする峰の頂きに縋つて攀づべき藪の一端を見出したかの如く、

「私は飽くまで法律の條文に違ひます。證書面の料金を頂かねばなりません。それとて、私の主張に曲事がありましたら、如何やうな刑罰でも甘んじて受ける覺悟でございます。」と因業に言ひ張るのであつた。

博士は何とかしてアントニオを救けてやりたいと思つてゐた。今度は被告に向つて、

「其方は、猶太人から借りた金の金子を返してやる力はないか」と訊いた。さうした訊問を、今かくと待ち設けてゐたパッサニオは、

「あります、あります。」と、叫んで横合から飛び出した。而して、二獲の貨幣を小脇にかゝへて是れ見よがしに、

「金子は此處に持参して居ります。被告に代つて私が支拂ひを致します。元金の二倍にして返したいと思つてゐます。二倍で足りなければ十倍にでもして拂ひます。それでもまだ足りないと言ひ張るやうならば、それこそ原告の無法と申すものです。理窟を楯にして、其實被告を恐ろしい淵に陥入れやうとする悪意が明らかに窺はれます。恁かる場合に立至りましては、多少法律の條文は御曲けになつても、この鬼のやうな残忍な男に、屹度御制裁を加へて頂きたいものだと思ひます。」と申立てた。

「いや、それはならん。(と博士は一言の下に斥けて) 既に一旦定められた法令を、勝手に曲けたり改めたりすることは固くならん。一たびそんな間違つたことをしたが最後、これが先例となつて永くヴェニスに患ひを残すことは明かぢや。さう云ふ事は斷じて出来ん。」ときつぱり云ひ放つた。

「や、これは恐れ入りました。お若いに似合はぬ賢明な判官さまだ。古のダ

ニエル様の再来だ。」と、シャイロックは自分に取つて有利な裁斷を、感に堪へないさまで賞めそやした。

博士はシャイロックの安心した面色を見て取つて、

「借用證書を持つてゐるなら、見せてはくれまいか。」と云ふ。

シャイロックはもう一も二もない。

「證書は。こゝにございます。」とあはくふやうにして證書を博士の前に差出した。博士は受取つて一通り読み下した。

「元金は三千兩だ。被告側からはそれを三倍にして返濟すると申し出てるが、何うぢや、示談にする氣はないか。」

と、またシャイロックを説かうとした。

「いけません。いけません。私は最早神様に誓言を立てゝゐるのでございませす。何と仰やつてもそれは駄目でございます。嘘の誓は恐ろしい。たとへヴェ

ニス一國の富に代へやうと仰しやいまして、一旦立てた誓言は破るわけにはまわりません。」と、誓言にかこつけて猶太人は巧みに言ひ逃れた。

博士はなほもシャイロックを説くことを断念しない。

「なるほど、此證書はもう期限が切れて居る。其方は契約の文面に随つて、アントニオの心臓に最も近い所から肉一斤を切取る権利を有つてゐる。併し可哀想ではないか。寛大な處置を取つては何うぢや。元金の三倍の金子を受取つて、この證書をわしに破かせては呉れまいか。」と云ひさま證書を二つに裂かうとした。

シャイロックは驚いた。それを制するやうな手つきで、

「證書面の料金を頂きました後ならば、それは裂かうが破らうが御自由でございます。お見受け申します所が、あなた様はお若いに似合はぬ立派な裁判官で在らせられるらしい。法律も能く通じておいでなさるらしい。あなた様

の御解釋は、一々理に當つて微塵も間違ひがないやうに窺はれます。あなた様はまことに立派な法律の神様ぢや。そこでお願い申します。何卒はやく裁判を進行させて頂きたいものですな。私が一旦神さまに誓ひをかけました決心は三寸の舌先ぐらゐで動くことではございません。」と、裁判の進行を需めて止まなかつた。

アントニオは裁判官たる博士の厚い情の取なしを心から感謝した。けれど石のやうな心の猶太人に向つては、何と云つて諭したところで無駄だと云ふことを知つてゐた。

「此上は、どうか速かに裁判を進めて下さいますやう、私からもお願い申します。」と博士に願つた。博士も是非がないと云ふ思ひ入れがあつて、
「では止むを得ない。其方は胸を開いてシャイロックの刃を受くる用意をするがい。」と申渡した。

「やツ天晴な裁判官様、お若いに似合はぬ賢明な博士様だ。」とシャイロックは獨りで喜んでゐる。博士は鷹揚な態度で、

「法律の條文に隨ひ、この證書面に認めた科料を受取るべき権利を、原告に許さなければならぬ。」と云つた。

「仰せの通りでございます。あゝ、あなた様はお若いに似合はぬ御發明な見上げたお方だ。」と、シャイロックは益々博士を謳歌した。

「さア、胸を開けい。」と、博士はアントニオに命じた。

アントニオは進んで胸を開いた。

「さうだ、心臓に一番近い處と證書にある其胸だ、判事さま、證書面の文句は、確かにさう認めてあるでございます。」と、シャイロックは博士を見上げて、勝利に誇る念を押した。

「いかにも其通りぢや。時に其方は、肉を量る爲の科料を用意してゐるか。」

と、博士の裁断は綿密であつた。

「はい、はい。此通りこゝに持つて参りました。」と、シャイロックは腰に吊した秤器を出して見せた。

「處でシャイロック、其方一人外科醫を法廷へ呼寄せて置く義務がある。事によると疵口の出血の爲に、被告は生命を失ふかも知れないから。」と、博士は何處までも思ひ遣りが深かつた。

「そんな事が證書に認めてございますか。」

「認めてはないが、それくらゐのことをして遣るのは、人間の慈悲と云ふものぢや。」

「そんな義務はありません。證書の面に見えませんが。」と、シャイロックは飽くまで證書の文面一點張りで押し通して動く氣色は見えなかつた。

博士は此奴度し難しと見て取つて、今度は被告の方に面を向けて。而して、

「アントニオ、其方は何か申残して置くことはないか。」と、慄れみのこもつた聲で尋ねた。

「イエ、別に何も言ひ遺して置くやうなことはありません。かねて覺悟をきめて参つたのですから。」と、アントニオは博士に向つて厚く禮を述べた。さうしてパッサニオの方に振り向いて、永い訣別の最後の握手をした。

「パッサニオ様、愈よあなたとお別れ申さなければなりません。ですが、私があなたの爲に慙う云ふことになつたからつて、それをお悔み下さつては困りますよ。何事も運命ですからな。いえ、私は、零落した悲惨なさまで長いこと苦しみもせず、一思ひに死んで行かれるのが寧ろ幸福だと思つてゐます。新しい奥さんに宜しく仰やつて下さい。アントニオが最後の有様はどんなであつたか、私があなたをどんなに愛してゐたと云ふことを、詳しく奥さんにお話しなすつて下さいよ。さうして、私が、パッサニオ様の親友たる

に足るか何うだかと言ふことを、奥さんに判斷して頂きたいと思ひます。嗚呼大事な親友を一人失つた、惜しいことをした——とさへあなたに思つて頂けば、それで私は満足です。あなたの爲に負債を拂つて慙うして犠牲となることを、決して残念だとも口惜しいとも思ひは致しません。私は猶太人の爲にどんなに深く胸を抉られやうともそれを厭ひません。それだけ貴下に赤心を捧げることになるのですから。」と、淋しい笑みを洩した。

パッサニオは、この温かな友の情に對して、先づ泣くより外はなかつた。「僕は君に何とお禮を云つていゝのかわからなくなつた。僕は君のお蔭で生命にも換へ難いほどの立派な妻を娶ることが出来たのだ。けれど、今となつては、この生命も、その妻も、この全世界も、君の貴い大切な生命には換へられなくなつた。僕はあらゆるものを失くして了つても構はないから、君の生命を救ふべき道があらば盡したいと思つてゐるよ。」と、固くアントニオ

の手を握りしめた。

シャイロックは此場の光景を見て、あア氣の毒だなどと思ふ憐れみの心なぞは
樂にしたくもない。

「隙がつぶれます。はやく御判決を願ひます。」と博士に迫つた。

博士は犯し難き態度を保持して、

「被告アントニオの肉一斤は、確實に原告シャイロックの右である。法廷は之
を宣告する。ヴェニス國法は之を許す。」と、凜然たる調子で言渡した。

「おう、公明正大な判事様。」と、シャイロックは歡び極まつて博士を拜まんば
かりであつた。

博士は色をも動かさない。

「其方は自から手を下して、被告の胸部から肉を切取らねばならん。ヴェニ
スの國法之を許し、法廷之を宣告す。」と、シャイロックに申渡した。

「ても博學な判事様。さア、宣告が下つたぞ。覺悟しろ。」

基督信者に向つて邪教徒の宿怨を晴らす時である。ヴェニス人に向つて猶
太人の宿怨を晴らす時である。シャイロックの眼は怪しく輝いた。全身の血は
湧いた。

アントニオは悪びれもせず、胸を開いて徐かに觀念の眼を閉ぢて立つた。

並み居る人々は、血の氣がなくなつた土人形のやうに顔を蒼白にして、胸
の動悸ばかり高く躍らして居た。

シャイロックは、磨ぎすました庖丁を右手に構へ、蛙をねらふ大蛇のやうな
凄まじい形相で突き進んだ。

アントニオの胸から紅の鮮血がさつと迸らうとした其時、

「待てッ。」と一聲法廷に凜と響いて、兩人の間に割つて入つたのは、判事と
して壇上に立つてゐた若い博士であつた。

博士はシャイロックに向つて、

「少しく其方に申渡すことがある。この證書の文面に據ると、アントニオの血液は一滴たりとも其方に渡すとは書いてない。明らかに肉一斤をと記してあるのみだ。其方は此證書面通りの抵当品を受取る権利がある。肉一斤を受取るがい。併し、其肉を切取るに當つて、若したゞの一滴たりとも貴き基督教信者の血汐を流すに於ては、ヴェニスに照らして、其方の家財も地所も残らず没収してしまふからさう思へ。」と、淀みなき言葉で鋭い止めを刺した。

(8)

猶太人はタチ／＼と、思はず三歩ばかり後方によろけた。

今の前小僧扱ひにされて癪にさはつて堪らなかつたグレシャノは、待つてゐたと云はぬばかりにシャイロックの鼻先へ顔を突き出して。

「ても博學な判事様。どうだ猶太人！ 博學な判事さまではないか。」と、

鵞がへしに、例の飄軽な形をしてからかふのである。

シャイロックは忌々しさうに博士の方を見上げて不平を鳴らした。

「そ、それが、法律と云ふものでございますか。」

「其方自身に法律の條文を読んで見るがい。其方は飽くまで理窟一點張りで證書面通りの裁判を要求したではないか。だから其方の望み通りに。イヤそれ以上に理窟詰めめな裁判をして遣はしたのぢや。」と、博士は皮肉に出た。

「ても博學な判事様。どうだ猶太人！ 博學な判事さまではないか。」とグレシャノは嬉しさうに飛び跳ねる。

シャイロックは張り詰めた力も弛んでしまった。腹立たしげに若い博士を睨んでゐた眼ざしも段々下へ／＼と俯目になつて來て、折角の復讐の計畫が水泡に歸した遣る瀬なさに、庖丁を投げ出して悶え始めた。

併し、何う考へて見ても血を流さずに人間の肉を切取る手段はない。血を

(8)

血を流すことにはならんぞ。また切取る肉は一斤より多くてもいけない。少なくともいけない。正に一斤だけを切取る権利があるのぢや。秤器にかけて若し一分一厘でも、イヤ、髪の毛一筋ほどでも分量が違つたが最後、其方の命はないものだと思へ。其方の財産は没收さるゝものだと覺悟しろ。」と、博士は益々鋭く肉迫して、身動きのならぬ處へ猶太人を追ひ込んで行くのである。

「おゝ、古のダニエル様の再来だ。どうだ猶太人！ 参つたらう。」と、グレシヤノは四たび叫んだ。

「猶太人は何を愚圖々々してゐるのぢや。はやく抵當の品を受取つたらいいではないか。」と、博士の追究はいよく急である。

「では、元金だけ受取つて歸ります。」と、シャイロックは益々折れて出た。

「こゝに用意してある。さア持つて行け。」と、パッサニオが財幣囊を渡さう

流さば彼れの身の破滅の基である。口惜しいけれど耻辱を忍んで妥協するより他に途はなかつた。彼は遂に折れて出て、

「それでは致方がございません。被告の申出で通りに證書面の元金の三倍で我慢を致します。」と、それでも持前の金儲け根性は忘れずに愆に轉ばうとするのであつた。

「その金子はこゝにあります。」とパッサニオは貨幣囊を差し出さうとした。

「ちよつと待て(と博士はそれを止めて)猶太人は飽くまでも法律を楯に取つて理窟詰めの裁判を要求してゐるのぢや。急ぐには及ばぬ。證書の文面にある抵當の外は何一品渡す必要はないのぢや。」と真綿で首を締める。

「どうだ猶太人！ 賢明な判事さま、博學な判事さまではないか。」とグレシヤノは三たび叫んだ。

「其方は判決を喜んで受けたではないか。早く肉を切取る準備をせい。だが、

としたのを、博士はまた止めて、
 「原告はそれを受取らぬと此法廷で拒絶したのぢや。法律の明文に照らして、證書面に契約してある通りの抵當の外は受取ることが出来ないのぢや。」と云ふ。

「成程これはダニエル様だ、古のダニエル様の再来だ。猶太人！ 貴様はうまい文句を俺に教へて呉れたな。」とグレシヤノは五たび叫んだ。

「それでは、元金だけ受取るとも出来ないと言はるのでございますか。」とシャイロックは泣きたいやうな氣持になつた。

「抵當品の外は受取ることにはならぬ。はやく命がけで切取つたがよからう。」と云はれて、最早絶體絶命になつた。而して悶えに悶えた果は棄鉢になるより外はなかつた。

「えエ、もう、どうとも好きになさるがい。論判は無益ぢや。私は歸らせ

て貰ひます。」と、立ち去らうとするを、

「待て、猶太人！ (と、博士は呼び止めて) 其方にはまだ申渡すべきことがある。このヴェニスの國法の定むる所によると、他國の人が直接若しくは間接に、ヴェニスの市民の生命を奪はんとした事實が明かになつた場合には、其者の所有せる財産を二分して、一半を其市民に與へ、一半を國庫に沒收し其者の生命は、生かすも殺すもヴェニス太公の思召次第で、何人も之に對して異議を申立てることが出来ないことになつてゐるのぢや。ところが、その方が今回の訴訟はその目的が丁度此場合に相當して居る。即ち、其方は間接にもまた直接にも、被告の生命を奪はんと企てたのである。前條の罪科を免るゝことは出来ない。其方の生命は太公の御手に握られてゐるのぢや。畏つて殿様の御慈悲をお願ひ申せ。」と、きつと申渡した。シャイロックは自分でかけた良に自分から首を突き込んで、身動きもならぬ破目に陥つたのである。

グレシヤノは又しても横合から口を出して、

「お慈悲を願ふなら、首でも縊らせて頂くやうにお願い申すがいゝぞ、併し財産を没收けられて了つちやア、繩一筋買ふお金にも差支へて来るだらう。そこで政府の費用を以て絞罪に處して下さいとお願ひするのが一等上分別だ。」と悪口を吐いた。

シャイロックは何と云はれても、もう腹を立てる氣力もない。

太公は流石に寛仁な心を持つてゐた。猶太人の冷酷な心と、ヴェニス人の温雅な心とは、まるで墨と雪とほどに異つてゐるぞと云ふ證據を見せてやるために、

「其方の哀願を待つまでもなく、一命は赦して遣はす。それから財産の處分に就ては、その一半は無論アントニオの所有に歸すべきものぢや。残る一半は、ヴェニスの國庫に没收すべき筈にはなつてゐるのだが、これは其方の心

次第ぢや。充分に悔悟の狀があらはれたらば、罰金だけで許してやらないと
も限らぬ。」と慈悲深い裁斷を下した。

「國庫に没收すべき分をさうして下さいますと、猶太人もどんなに幸福だか
知れませんか。シャイロック、其方は難有いとは思はぬか。」と、博士は暗に悔悟
せよと勧めた。

シャイロックは博士の爲に、一打一撃毎に痛さの加はる重い鐵槌を食はされ
て、散々な敗北を招いた。金を生命の猶太人が、財産に離れるやうになつて
は、もうお了ひである。生命を奪はれたのも同じことである。彼はもう全く
自暴自棄に陥つた。

「生命も何にもかも、残らず取り上げて貰ひませう。折角丹精した財産を取
り上げられて了つては、生命を奪られたのも同じことでございます。」と、氣
も狂はしう眼を噴らせてあらぬ方を睨んでゐる。

博士はアントニオの方に向つて、「シャイロックに對して何か慈悲をかけてやることはないか。」と質ねた。アントニオは、
 「お言葉に甘へてお願ひがございます。猶太人の財産の一半、即ち國庫へ没收さるべき分が、只今仰せられました通りに料料だけでお赦し下さいますことになりましたら。私共に於きましても幸福でございます。それから又残る一半、即ち私にお與へ下されます分は、當分私の手許に保管して置きましてシャイロックの死後、彼が娘の婚、即ち先頃兩人で駈落を致しましたロレンゾと申す青年に引渡してやりたいと存じます。尙此外にお願ひ申上げたい二つの條件は、此度の寛仁なる御裁斷に對して、シャイロックは以後基督敎信者になると云ふ事と、今一つ、死後一切の財産を擧げて彼の娘夫婦に譲り渡すと云ふ證書を只今此處で認めさせます事とでございます。お慈悲を持ちましてお聞き届けを願ひます。」と申立てた。

太公は頷かれて、
 「宜しい聞届けた。猶太人も否やはあるまいな。それとも、不服を申立てるに於ては、只今申渡した赦免の條々を取消して了ふからさう思へ。」と云ふ。
 博士は優しく、
 「猶太人！ よもや不服はあるまいな。」と念を押した。
 「不服……はい、はい、仰やる通りに致します。」と、シャイロックは投げ出したやうな調子で、どうでも成るやうに成るがい、と棄鉢な返答をする。
 博士は書記に命じて直に財産讓渡の證書を認めさせ、シャイロックに調印させやうとしたが、シャイロックは、
 「ひどく気分がすぐれませんが、どうか此儘退廷することを御許しに預りたい證書は後から御届け下さいましたら、調印をして差出しますから。」と、如何にも苦しげである。太公も氣の毒に思つて、

『では退廷を許すが、調印のことは屹度間違へてはならぬぞ。』と申渡す。
 シャイロックは、よろけながら法廷を出て行つた。
 ヴェニスの市民を驚かせ、太公を始めあらゆる人々の心を惱ませた人肉質入の裁判も、若い博士の上手な審理によつて、正しき者を死地より救ひ出し、邪まなる者を窮地に追ひこめて、茲に意想外の芽出たき終りを告げた。
 被告側の喜びは云ふまでもないこと、市民も満足した。太公は博士に向つて、是非響應をしいたいから邸までお出では願へまいかと云つたけれど、博士は今夜中にバヂュアに向つて發足しなければならぬ急ぎの川をひかへて居るからと、太公の好意を謝した。

太公を始め一同の者が法廷を去つた後で、バツサニオとアントニオとは、博士に向つて心から今日の公明なる裁判の有難さを感謝した。さうして、バツ

サニオは、

『ほんのお禮のしるしまでに、猶太人に支拂ふつもりで持つて参りました此三千兩を、あなたに御贈り申したいと思ひます。』と云つたが、博士は財貨に手をだも觸れない。

『人間に取つて此上もない報酬は、心の満足と云ふことです。私はあなた方を救ひ申すことが出来て自分には非常に満足に感じてゐます。報酬はそれによつて既に得て居る譯です。この上の望みは有つてゐません。何れそのうち又お目にかゝることもありますから、私の顔を御忘れのないやうに能く御記憶を願ひます。それでは、御機嫌よう。』と、別れて行かうとした。
 バツサニオは引き留めて、

『でも、この儘お別れしては何だか氣が濟みません。お禮と申しては失禮ですから、せめて記念として何か私達の持つてゐる品を御持歸りが願ひたいの

です。」と、強つて願ふのである。

「それほどに仰やいますならば。」と、博士はアントニオに向つては手袋を、
 パッサニオに向つては指環を頂戴したいと云つた。

アントニオは喜んで手袋を脱つて博士に贈つたが、パッサニオは當惑した
 その指環はボオシヤ姫から結婚の記念に貰つたので、如何なことがあらうと
 も他人に與へてならぬ。若し亡くして了つた場合には、兩人の間の愛情も立
 ちどころに冷めて了ふ——と約束の言葉を固く取り交はした、生命よりも大
 切な指環である。

「これは實に詰らないものですよ。こんな指環を差上げては私の耻になりま
 すから。」と、苦しい言ひ譯で其場を胡摩化さうとしたが、博士は聽かない。
 「私には其指環が氣に入りましたのです。他の品は何にも欲しいとは思ひま
 せん。」

「この指環には少々こみ入つた事情がありまして（と、パッサニオは術なけ
 に）こんな詰らないのよりか、あなたにはヴェニス中で一等高價な指環を探
 し出して差上げます、これだけはどうか御勘辨を。」

「何でも望めと仰やつたのは、つまり口先だけの御世辭だつたと見えますね
 いらぬと云ふものを、ねだれと勧め、それではこれをと望めば、それはいけ
 ないと仰やる。お蔭で私も結構な挨拶の仕方を覚えました。」と、博士は慙と
 憤つた顔をして見せた。パッサニオは是非なく指環の秘密を打明けた。

「實は此指環は妻からの贈物で、これを手づから私の指に箝めて呉れます際
 に、どんな事があつても賣つてはならん、他人に遣つてはならん、失くして
 はならんと、固い誓言を立てさせられたのですから。」

「物を遣り惜しみをする場合に、それは誰れしも使ふ口實ですよ。併し能く
 物を考へて御覽なさい。あなたの奥さんが狂人ででもあるなら知らぬこと、

假りにも貴下に對する私の功勞を認めて下さることが出来る位の方ならば、その指環一つ私に下さつたくらゐで、そんなにまで、あなたをお責めなさることはあるまいと思ひますが……イヤ、そんな理窟を云つたところで始まらない。では、これでお別れ申します。御機嫌よう。」と、云ひ棄て、若い博士は若い書記と共に、さつさと行つて了つた。

パッサニオは途方に暮れた。生命にも換へ難い大恩のある人を怒らせて歸してしまつては、自分の名譽の爲にも、また親友の名譽のためにも、取かへしがつかぬことゝなるのだ。茫然として後ろを見送りながら、腕を拱いてなほ迷うて居るのを、アントニオは見兼ねて聲を掛けた。

「猶豫をなさる場合ではありません。はやく彼の方に指環を御あけなさい。奥様との誓ひの言葉も重いでせうけれど、彼の方の功勞と、私の友誼と兩方

を合はせて秤量にかけましたら、いくらか此方の方が重くはなからうかと思ひますが。」

パッサニオも心を決して。はやく思ひ切つて遣ればよかつたものをと後悔した。傍に居るグレシヤノを顧みて、

「君、はやく追つかけて、行つて博士に此指環を渡してくれたまへ。それから、アントニオの邸へまでお連れ申して来てくれたまへ。さ、はやく、急いでく。」と急ぎ立てる。

グレシヤノは指環を持つて博士の後を追蒐けて行つた。街頭で直ぐ追付いて、首尾よく指環を博士に渡したが、博士に頼まれて若い書記をシャイロックの宅まで案内した時、この書記の強つての懇望により、自分の指に嵌めて居た指環を、書記に與へるべく餘儀なくされた。その指環はグレシヤノが、ボオシヤの侍女ネリッサから結婚の記念に貰つた品で、パッサニオと同じやう

に、決して人手には渡さぬと、誓ひを立てさせられてゐたものであつたのだ。

七 ベルモント ボオシヤ邸前

美しい月の夜である。ベルモントのボオシヤ邸では、姫と侍女ネリッサとが旅に出て留守を預つてゐる欠落者の猶太人の娘のジェシカとロレンゾとが邸に通ずる小徑を逍遙して、甘い戀の追憶に耽つてゐる。柔かな風が木の葉を鳴らさないほどに、そつと接吻をして行く氣持の好い靜かな夜半であつた。

「まア、何と云ふ美しい月だらう。王子のトロイラスが、トロイの城壁の上に立つて、戀しいクレシダ姫の臥て居る敵の陣所を、惆悵として眺めたのは、こんな晩だつたに違ひないね。」

「露を踏みしだいて戀人に逢ひに行つた少女のシスビが、獅子の影に驚ろか

(78)

されて逃げたのも、こんな晩でしたらうと思ひますわ。」

「女王のダイドーが、柳の技を手に持つて荒磯際に立ちつくし、戀しい男を招き返さうとしたのは、こんな晩だつたに違ひないね。」

「メチアと云ふ女が、年老つて衰へた父を若返らせん爲に、靈藥になる草を採りに行つたのも、こんな晩だつたと思ひますわ。」

「丁度こんな晩だつたね——ジェシカと云ふ可愛い娘がロレンゾと云ふやさ者と一緒にヴェニスを欠落して來たのは。」

「丁度こんな晩でしたわ——ロレンゾと云ふ若い男が、お前は可愛い何のと出たら目の甘い言葉で、ジェシカと云ふ娘を迷せて了つたのも。」

「丁度こんな晩だつたらうよ——ジェシカと云ふ可愛い女房が、亭主をさんざ云ひまくるのを、お人よしの亭主野郎奴、さうか、くくと尻に敷かれて聞いてゐたのは。」

(79)

「そんな事を云つて、こんな晩づくしの言ひつ競をするなら、夜通しかつたつて、あなたなんぞに負けるものですか。」

兩人は楽しい月の夜半を、子供のやうなたわいもないことに夢中になつてゐる處へ、邸の召使が、夜明前にボオシヤの歸つて來ると云ふことを知らせた。續いて又一人の飛脚が目出度い消息を齎らせて、バツサニオも夜明前に歸つて來ると云ふことを知らせて來た。ロレンゾとジェシカの指圖で、邸は待設けの準備に活氣立つて來た。

落付いた月夜の静かさに相應しいやうな美しい樂の音が流れて來る。それは此邸の主の歸りを迎ふる讚美の歌であつた。

侍女のネリッサを連れて、森の小徑を歸つて來た。ボオシヤは、この樂の音を聞き付けて、晝間聞くとはい違ひ身に沁みて嬉しいものだと思つた。出迎

へたロレンゾや、ジェシカや、その他多くの召使の者共に對して、ボオシヤとネリッサの外に出したことは夫に知らさないやうにと口止めをして居る處へ、喇叭の音は主人バツサニオの歸邸を報じた。

バツサニオは、恩人のアントニオや、仲よしのグレシヤノや、従者等を隨へて威勢よく歸つて來た。而して、途に迎へた妻のボオシヤに、この大恩人たり、また親友たるアントニオを紹介した。ボオシヤは、言葉に盡し難きアントニオの恩に對して、心から感謝の意を表し、慙うして訪ねて來てくれたことを此上もなく喜んだ。さうして出來得る限りの款待をしなければならぬと思つた。

主人夫妻が珍客の歡迎に夢中になつてゐる間に、侍女のネリッサと、その夫のグレシヤノとは、聲高に口評ひを始めた。

ネリッサが何か云つて頻りに怒つて居るのを、グレシヤノは宥めるやうに

「それはお前の邪推と云ふものだよ。あのお月さまが證人だ。私はあの品を判事さんの書記に遣つたのだよ。」と、頻りに辯解してゐる。

「お前さん達はもう喧嘩なの。一體何うしたと云ふのです。」と、ボオシヤは兩人の間に割つて入つた。

グレシヤノは、きまりの悪い顔をして、

「なに詰らない金の指環なんです。此女から貰つたのですがね——忘れちや厭よなんて、刃物にでも彫つてありさうな文句を刻んだ安物の指環なんです。」と、ネリッサの顔を横目に見ながら喧嘩の次第を語つた。

ネリッサも黙つてはゐない。

「文句が何うしたと云ふのです。安物が何うしたと云ふのですよ。貴郎は約束さへお守りになればそれでいゝぢやありませんか、私があ品の品を貴郎に上げました時に、貴郎は何と申しました。——此指環は一生肌身はなさず持

つてゐる、死ぬる時には墓の中へ一緒に持つて行く——と云つてお誓なすつたぢやありませんか。その立派な誓詞に對しても、あなたは彼の品を大切になさらなくてはならない筈ですのに……何ですつて？ 判事さんの書記に遣つたんですつて……多分その書記と仰やるのは、お髯なんぞの生えてゐない、可愛らしい方でせうよ。」と、そろ／＼嫉きはじめた。

「そりや、若いから髯はないにきまつてゐるさ。けれど、大人になれば屹度生えて来るよ。」

「大人になると、女は男に生れ變るものでせうか。」

「さう疑ぐり深くつちや、話も何も出来やしないぢやないか。私は確かに若い男に遣つたに違ひないんだよ。まだほんの小僧つ子で、身丈ならお前くらゐしきやありやアしない。判事さんの書記で、よく喋べる奴でね。今度の事件の報酬にあの指環を呉れると云ふんだ。それを私がどうしても断ることが

出来なかつたほど口が達者なんだもの。』

黙つて双方の言ひ分を聞いてゐたボオシヤは、この時口をはさんで、

『遠慮なく申しますと、それはあなたの方がよくないと思ひますわ。花嫁からの初めての贈物を、さう軽々しく人に與へると云ふ法がありませんか。夫婦の愛情の變らぬ印に、あなたの體にくつつけて、一生大切にしていられないやうになさるのが、良人としての道ではなからうかと思ひますわ。妾もあなたと同じやうに、良人に記念の指環を贈りました。而して一生肌身を離さぬと云ふ約束をして貰ひました。現に此處に在らつしやいますが、私の良人に限つて、決して誓言をお破りになるやうな方ではなからうと思ひます。たとへ世界中の財産を持つて来て、あの指環と交換して呉れと申す者がありましたら、良人は決して手離すやうなことはしなからうと信じてゐます。ねえ、グレシヤノさん、あなたは妻のネリッサが可哀想だとは思はないのですか。』

もし私だつたら、きつと氣が狂つてしまひますわ。』と、裁判官氣取りでグレシヤノをたしなめた。

驚いたのはバッサニオである。グレシヤノの指環の問題は、他人事ならぬ我身の上の大事とはなつて来た。

『こんな事なら左の腕を切つて、一緒に遣つて、もくればよかつたのに、あゝ、弱つたなア。』と獨言を云つてゐる。

旗色が悪くなつて来たグレシヤノは、自分の罪を幾らか軽くしやうとの無分別から。

『指環を取られたのは私だけぢやありません。現にバッサニオ様も判事さんに指環をお遣はしになつたのですよ。いえ、まったく断らうとしても断られなかつたのです。判事さんも書記の小僧奴も、指環の外には何にも要らないと云ひ張るのですもの。』と、ボオシヤに訴へた。

ボオシヤは、グレシヤノを棄て、パッサニオの方に向つて来た。
 「あなた、どの指環をお遣はしになりました。まさか、妾から差上げましたあの指環ではごさいますまいね。」と、皮肉に裏門から迫つて来た。パッサニオも嘘をついて済むものなら、此場合、「さうだ、あなたの指環は遣らなかつた」と云つて無事に納めたいとは思つたが、もうそんな猶豫は無くなつて居た。是非なく、

「御覽の通りです。あの指環はなくなりました。」と、左の手の指を前に差し出して見せた。

「それでは、貴郎の御心は變りましたね。」

「でも、止むを得なかつたのですから……前後の事情を酌んで、少しは私の身にもなつて下さい。」

「あの指環がどんなに大切な品だかお考へになりましたら、どんな事があら

うとも、お手離しになることは出来なかつたらうと思ひますわ。また先方の相手がどんなわからない男でも、これは結婚の記念として妻から貰つた大切な品だからと、あなたさへ確かにお拒みなさいましたら、それでもとは云ひ張りますまいに。こりや、矢張りネリッサの申しました通り、あなたも何處かの御婦人に、お遣はしになつたに相違ありませんまい。」

「それは邪推と云ふものです。私は私の名譽にかけて、決して婦人なんぞに遣つたのではないと云ふことを誓ひます。あの指環は確かに若い博士の判事さんに上げたのです。最初私は猶太人に支拂ふ積りで持つて行つた三千兩を報酬として贈らうとしたのですけれど、どうしても受取らうと申しません。而して、是非あの指環が欲しいと望みます。それでも私は断りました。親友の生命の恩人であるにも拘らず、あなたに済まないと思つて一旦は拒絶したのです。博士は不興な顔をして立去りました。あなたもつて此場合に臨んだ

らよもや其儘に打棄つては置かれますまい。私は止むを得ず指環を持たせて後を追懸けさせたのです。何卒察して下さい。ゆるして下さい。あの清く輝く御空の星にかけて誓ひます。私は決して浮いた心からあの指環をなくしたのではないのですから。」と、パッサニオは涙を流さんばかりに、あの時の切ない事情を述べて辯解した。それでもボオシヤの心はまだ十分に解けぬらしい。この體を見たアントニオは、知らぬ顔をしてゐる譯にゆかなかつた。

「美しい家庭に、こんな風波を起させたのも、皆私のためなのです。」と打萎れた。ボオシヤは却て氣の毒に思つて、

「御心配下さいませぬ。あなたに對しては、私共心の奥底から感謝して居ますのですから。」と笑顔を見せる。パッサニオはなほ色々と言葉を盡して自分の失策をわびた。アントニオも、

「私はパッサニオさんの爲に一度は體を抵當に入れました。今度は此魂を抵

當に入れて、パッサニオさんが二度と誓言を破らないと云ふ保証人に立ちますから、指環のことはもうどうか御勘辨が願ひたいものです。」と、ボオシヤに取りなした。ボオシヤの心も今は解けないではゐられなかつた。

「では、貴下を保證人にお願ひ致します。就きましては此指環をパッサニオにお渡し下さいまして、以前の品よりは一層大切に致しますやうに仰やりつけを願ひます。」と、一個の指環をアントニオに托した。アントニオはそれをパッサニオの手に取次いで、

「さア、パッサニオさん、この指環を失くしないと云ふ御誓言をなさい。」
パッサニオは、渡された指環をつくるく眺めて、

「おや、おや、これは私が博士に贈つた指環だ。」と不思議がる。

ネリッサも一個の指環をグレシヤノに與へて、

「これは妾が若い小僧つ子のやうな書記さんに貰つたのですけれど、あなた

に上げますから、二度と亡くしないやうになさいよ。」と云ふ。
 グレシヤノが其指環を見ると、彼が判事の若い書記に贈つたのと同じ品であつた。

ボオシヤは不思議の思ひに惑はされてゐる二人の顔を等分に眺めながら、
 「こゝにバデュアのベラリオ博士から来た手紙があります。皆さん、これを御覧になりましたら、彼のヴェニス法廷にあらはれた博士はボオシヤで、随行の書記生はネリッサであつた事がおわかりになります。」と、初めて狂言の底を割つた。

「あッ。」

バツサニオと、グレシヤノとが慄う叫んだのは殆んど同時であつた。二人は暫し開いた口が塞がらなかつた。

ボオシヤは言葉を續けて、

「アントニオさんには、途中で好いお便りを齎して参りました。この書状を開けて御覧なさい。難破したと思つたあなたの持船が三艘まで、貨物を満載して不意に港に着いたと書いてあります。」と云ふ。

アントニオは、夢ではないかしらと思つた。ボオシヤはなほも言葉を續けて、

「それから、ロレンゾさんにも、妾の書記生が好いお土産を持つて歸りました。」と云ふ言葉の下から、ネリッサは一通の證書をロレンゾに渡した。それはシャイロックの遺産譲渡證で、死後財産の全部を、娘のジェシカと其夫のロレンゾに譲る旨を認めてあつた。兩人は神様を拜むやうに。ボオシヤの前に跪いて感謝の意を表した。

夜は明けかゝつた。東の空には紫の雲が横に流れて、希望に充ちた曙の光

が、ボオシヤ一家の人々を祝^{ことほ}ぐかの如く、美^{うつく}しく照^てり映^はえるのであつた。

——(完)——

ヴェニス^スの商人 終

昭和四年十月五日印刷
昭和四年十月八日發行



世界文藝叢書
—(4)—
ヴェニス商人

定價 參拾錢

| | |
|-----|--------------------------|
| 編輯者 | 文藝社編輯部 |
| 發行者 | 東京市牛込區新小川町二丁目四番地 小林善八 |
| 印刷者 | 東京市神田區仲樂町二十番地 關根正惠 |

(關印部刷社藝文)

發行所 東京市牛込區新小川町二丁目四番地
(振替東京二二二〇二番) 文藝社

小 林 篤 里 著

國民叢書

振かな付
各冊讀切
四六列裝
各冊百餘頁
定價四拾錢
送料四錢

着實なる思想——豊富なる知識——秀でたる常識——これは國民の等しく要求するところである。本叢書は此の要求の聲に鑑み、献身的の努力を以て國民全般に奉仕せんとするもので、其の説くところ、其の論ずるところは簡易にして、而も健全なる國民必極の知識を注入せんとして、廣く百科の問題を網羅したる大寶典である。本叢書のいづれの一冊を選むも悉く之れ知識の源泉である。「萬有文庫」は趣味と實益とを以て進み、「國民叢書」は學藝、修養を主として、眞面目に進まんとするのである。滿天下の諸賢は宜しく圖書の選擇に留意せられ、處世の安定と、家庭の圓滿を圖る爲め本叢書の購讀に躊躇なからんことを切望するのである。

國民叢書の名聲は社會周知のこと

發賣部數實に二百萬冊を突破す

文部省認定 著溪會推薦 文献賞受領の良書!

◇ 既刊書目次の如し

國民叢書既刊目錄 (各冊十四錢)

| | |
|----------------|-----------------|
| (1) 新しき修養 | (15) 論理學早わかり |
| (2) 宗教早わかり | (16) 野 球 の 話 |
| (3) 立志より成功への近道 | (17) 斯の如き人は成功する |
| (4) 國民としての常識 | (18) 心理學の話 |
| (5) 新聞を読む基礎の知識 | (19) 婦人の進むべき道 |
| (6) 經濟學の知識 | (20) 理想の家庭 |
| (7) 日常科學の話 | (21) 教育學の話 |
| (8) 偉人の修養 | (22) 倫理學の話 |
| (9) 哲學早わかり | (23) 平 凡 道 德 |
| (10) 新しき年中行事 | (24) 精 神 修 養 |
| (11) 藝 術 の 話 | (25) 向上發展の基礎 |
| (12) 思 想 善 導 | (26) 佛 陀 の 福 音 |
| (13) 文化生活の基調 | (27) 基 督 の 福 音 |
| (14) 青年の進むべき道 | (28) 無線電話早わかり |

◇ 東京市牛込區 文藝社 電話二〇一〇番

◇ 東京市牛込區 文藝社 電話二〇一〇番

(各冊十四錢) 國民叢書既刊目錄

| | | | |
|------|----------|------|----------|
| (29) | 無線電話の知識 | (43) | 科學萬能の世界 |
| (30) | 世界の格言と警句 | (44) | 宇宙の秘密 |
| (31) | 家庭科學の話 | (45) | 陸軍の知識 |
| (32) | 普通選舉の話 | (46) | 日本歴史の知識 |
| (33) | 政黨早わかり | (47) | 東洋歴史の知識 |
| (34) | 貯金のすゝめ | (48) | 西洋歴史の知識 |
| (35) | 音樂の知識 | (49) | 日本歴史年表 |
| (36) | 公民としての心得 | (50) | 明治大正の事蹟 |
| (37) | 成人教育の話 | (51) | 今日の歴史 |
| (38) | 農村發展の基礎 | (52) | 文學概論 |
| (39) | 日本地理の話 | (53) | 國文學史 |
| (40) | 全國名所めぐり | (54) | 商事要項 |
| (41) | 萬有科學の知識 | (55) | 實修商業簿記 |
| (42) | 自然科學の進化 | (56) | メートル法の知識 |

東京市牛込區 文藝社 振替口座 東京 二〇一〇番 二〇番

(各冊十四錢) 國民叢書既刊目錄

| | | | |
|------|---------|------|----------|
| (57) | 憲法早わかり | (63) | 國語學の知識 |
| (58) | 法律の知識 | (64) | 現代文學の輪廓 |
| (59) | 陪審法早わかり | (65) | 教育勅語謹解 |
| (60) | 佛教入門 | (66) | 社會問題早わかり |
| (61) | 國文法の知識 | (67) | 金解禁早わかり |
| (62) | 修辭學の要領 | (68) | 美術の知識 |

新時代に生きるの誇りは「國民叢書」の愛讀者たることによつて得られる。

本叢書は豫約出版の様に窮屈なものにあらず。何人にも開放せられたる民衆大學講座である。讀み度いと思ふ本を選んで、一冊でも二冊でも自由に讀み得る寶庫である。而も難解なる性質のものに對しても、一讀了解の出来るように、説述せられたのが本叢書の特徴である。(自由選擇二幾冊にても分賣す)

東京市牛込區 文藝社 振替口座 東京 二〇一〇番 二〇番

空前の大文庫——未曾有の廉價圖書の出現

萬有文庫

ポケット本 各冊讀切 定價十五錢 裝幀二種 選擇自由

讀書の習慣は現代人修養の基礎である、然も世に良書は甚だ多いが其れ等に親しむ機會は餘りに乏しい。茲に、我「萬有文庫」は總てが書おろして、一切の學術に關する良き内容を平易に説く一方に、現代人必讀の文學、藝術は勿論、娛樂スポーツ、趣味一般に亘り、宇宙萬有と人生百般に關する知識と情操と、並びに若々しきセンチションを包含する活きた學問の泉であり、百般の興味と感激の庫であることを期する。萬有文庫、同時に萬人文庫であるべく至廉の定價と、清亨な外裝をもつて讀書家の自由選擇に任すのである。空前の計畫、未曾有の便益書！

◇既刊書目次の如し

萬有文庫既刊目錄 (各冊五十錢)

| | |
|---------------|-------------------------------------|
| (1) カント哲學物語 | (15) ユーモア傑作集 |
| (2) 戀愛の進化 | (16) 日本神話 |
| (3) マルクス資本論物語 | (17) 希臘羅馬神話 |
| (4) 聖書の要領 | (18) 接吻の歴史と技巧 <small>(發賣禁止)</small> |
| (5) 西洋傑作小話 | (19) 美人になる秘訣 |
| (6) 現代歐洲哲學物語 | (20) 性の常識 |
| (7) 性とエデンの園 | (21) 結婚の歴史 |
| (8) 心の不思議 | (22) 戀愛物語 |
| (9) 産兒制限の考察 | (23) 新しい映畫の見方 |
| (10) 西洋獨占ひ | (24) モダン・ガール物語 |
| (11) 雄辯術 | (25) 幽霊物語 |
| (12) 株式取引の話 | (26) 星のロマンス |
| (13) 議會解散と普選 | (27) 理想郷物語 |
| (14) 笑の心理學 | ◇以下續々刊行 |

◇東京市牛込區文藝社 東京市牛込區文藝社 東京市牛込區文藝社 東京市牛込區文藝社

◇東京市牛込區文藝社 東京市牛込區文藝社 東京市牛込區文藝社 東京市牛込區文藝社

小林篤里著 新記述法による日本歴史

日本國民史

四六判、美表装
名冊百餘頁
定價六拾錢
送料各六錢

◇興味中心・通俗本位の日本國民の歴史！

歴史は即ち一國の履歷書である。日本歴史は之れ我帝國、我國民の履歷書である。苟も我帝國々民として我國の歴史に暗いのは、則ち自分の履歷を知らぬに等しく、まことに恥しいことである。殊に我帝國には世界に秀絶したる精神がある。我憲法も此の間に起原し、我國民道徳も此の中から胚胎して居るのである。この國體、此の精神も亦我國史を外にして説明は加へられぬ。

本書は天孫降臨に始め、現今聖代までの要項的史實、および忠臣、義士、孝子、賢婦等、有ゆる方面に亘つて系統的に叙述したもの、即ち建國三千年の歴史を極めて通俗的に筆を進め、史實趣味を普及せしめんとする主旨のもとに刊行したものである。

日本國民史既刊目錄 (各冊十六錢)

| | |
|-----|----------|
| 第一卷 | 建國より平安朝へ |
| 第二卷 | 源家と平家 |
| 第三卷 | 鎌倉幕府時代 |
| 第四卷 | 吉野を護る人々 |
| 第五卷 | 建武の中興 |
| 第六卷 | 勤王の輩出 |
| 第七卷 | 足利幕府の建設 |
| 第八卷 | 應仁の亂前後 |

◇ 東京市牛込區新小川二丁目四ノ番 文藝社 電話一〇二〇番 ◇

◇ 東京市牛込區新小川二丁目四ノ番 文藝社 電話一〇二〇番 ◇

小林篤里著 = かく述べれば歴史は無味乾燥にあらず

興亡五千年史

四六判・美装・洋綴
各冊百餘頁
定價各六拾錢
送料各六錢

見よ!!

歴史の民衆化——通俗的記述
——興味中心の記述——
歴史の讀物化

今日見る幾多の歴史は、餘り程度の高きために一般の人々に適せず、或は事實の簡に過ぎたるため了解に苦む場合が多い。著者はこの點を考慮して、傳説時代の世界から筆を起し、努めて平易に五千年に亘る國家の興亡と、それに聯關せる偉人豪傑の事蹟を述べ、吾が同胞に向つて世界人類の残したる業蹟を知らせようとしたものである。ともすれば無味乾燥に流れようとする歴史の弊を補はんがため、極めて通俗的に而も詳細に且つ興味を中心にして述べし所は著者の新しい試みとして讀者に批判を仰がんとする所である。

興亡五千年史既刊目錄(各冊十六錢)

| | | | | | | | | | | | | | |
|------|------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第一卷 | 傳説の世界 | 文 | ア | テ | ネ | ス | パ | ル | タ | 時 | 代 | 生 | 界 |
| 第二卷 | 文明の誕生 | 文 | ア | テ | ネ | ス | パ | ル | タ | 時 | 代 | 生 | 界 |
| 第三卷 | アテネ・スパルタ時代 | ア | テ | ネ | ス | パ | ル | タ | 時 | 代 | 生 | 界 | |
| 第四卷 | ギリシアの文明 | ギ | リ | シ | ヤ | の | 文 | 明 | | | | | |
| 第五卷 | キリシトの出現 | キ | リ | ス | ト | の | 出 | 現 | | | | | |
| 第六卷 | フランスの建国 | フ | ラ | ン | ス | の | 建 | 國 | | | | | |
| 第七卷 | アラビヤの勃興 | ア | ラ | ビ | ヤ | の | 勃 | 興 | | | | | |
| 第八卷 | 土耳古の盛衰 | 土 | 耳 | 古 | の | 盛 | 衰 | | | | | | |
| 第九卷 | 宗教改革時代 | 宗 | 教 | 改 | 革 | 時 | 代 | | | | | | |
| 第十卷 | ルイ全盛期 | ル | イ | 全 | 盛 | 期 | | | | | | | |
| 第十一卷 | 亞米利加發見 | 亞 | 米 | 利 | 加 | 發 | 見 | | | | | | |
| 第十二卷 | 英吉利の建国 | 英 | 吉 | 利 | の | 建 | 國 | | | | | | |
| 第十三卷 | 英國の議院政治 | 英 | 國 | の | 議 | 院 | 政 | 治 | | | | | |

東京市牛込區新小川二丁目四番地 文藝社 電話一〇二〇番

東京市牛込區新小川二丁目四番地 文藝社 電話一〇二〇番

(錢十六冊各) 書叢文作社藝文

著里鷺林小

- (1) 新選書簡文
- (2) 口語體書簡文
- (3) 美文精選
- (4) 文章組立法
- (5) 叙事文と叙景文
- (6) 新しき記事文
- (7) 新しき紀行文
- (8) 新しき日記文
- (9) 新時代の論文
- (10) 小品文精選
- (11) 新選祝賀弔祭文
- (12) 名家文選

◎ 作文の絶好参考書として定評あり

時代の推移はあらゆる方面に蓄きを捨て、新しきに就く傾向を有してゐる。新しき時代には新しき時代の文學がある。著者はこの點について大いに鑑みることがあり、新時代に最も適合する作文書の體系を編むことに多年心を注いで来た。かうして編まれたものが「文藝社作文叢書」である。作文に關するあらゆる方面の知識は本叢書によつて充分に得られることを確信する。殊に本叢書の誇りとする所は、定價の至廉なる點で、これは夙に文章報國をモットーとしてゐる我が社の一事業として一般諸賢の批判を仰がうとする所である。

◎ 學生諸君一般讀書家より白熱的歡迎

錢六冊送 錢十六價定 冊各 頁十六百各裝美判六四

◇ 東京市牛込區 文藝社 電話一〇二〇番 ◇

書圖評好社藝文

| | | | | | | |
|-----------|---------|----------|----------|----------|----------|-------------|
| ◎小林鷺里著 | ◎小林鷺里著 | ◎小林鷺里著 | ◎小林鷺里著 | ◎小林鷺里著 | ◎小林鷺里著 | ◎小林鷺里著 |
| 諷刺と寓意の社會相 | 俳趣情景 | 文章三百六十五日 | 文章春秋 | 文章報國 | 警鐘の亂打 | 鷺里隨筆 |
| 一、二〇〇、八 | 一、二〇〇、八 | 一、二〇〇、八 | 一、二〇〇、二〇 | 一、二〇〇、〇八 | 一、五〇〇、二〇 | 定價一、五〇〇送、二〇 |

◇ 東京市牛込區 文藝社 電話一〇二〇番 ◇

書圖評好社藝文

| | | | |
|--------------------------|--------------|---------|------|
| ◎小林鶯里著 | 短歌は如何して作るか | 定價 一、二〇 | 送、〇八 |
| ◎小林鶯里著 | 新しい詩は如何して作るか | 一、二〇 | 〇八 |
| ◎小林 操著 | 作文の考へ方と模範答案 | 一、二〇 | 〇八 |
| ◎小林綾子著 | 鈴蘭の歌へる | 一、二〇 | 〇八 |
| ◎小林 操著 | 或る學生の手記 | 一、二〇 | 〇八 |
| ◎小林綾子 <small>操共著</small> | 運命に従ふ者 | 一、五〇 | 〇八 |
| ◎小林綾子 <small>操共著</small> | 若人の胸へ | 一、五〇 | 〇八 |
| ◎大鹿 卓著 | 詩集 兵 隊 | 一、五〇 | 一〇 |

◇ 東京市牛込區 文藝社 東京市牛込區 文藝社 ◇

語物傳史の意得者著

| | | | |
|--------|-----------|---------|------|
| ◎小林鶯里著 | 釋迦の生涯と思想 | 定價 一、五〇 | 送、一〇 |
| ◎小林鶯里著 | 基督の一生 | 一、二〇 | 〇八 |
| ◎小林鶯里著 | 大 楠 公 | 一、三〇 | 〇八 |
| ◎小林鶯里著 | 新 田 義 貞 | 一、二〇 | 〇八 |
| ◎小林鶯里著 | 豊 臣 秀 吉 | 一、五〇 | 二〇 |
| ◎小林鶯里著 | 眞 田 の 智 謀 | 一、三〇 | 二〇 |
| ◎小林鶯里著 | 武 田 信 玄 | 一、二〇 | 〇八 |
| ◎小林鶯里著 | 曾 我 兄 弟 | 一、二〇 | 〇八 |
| ◎小林鶯里著 | 高 山 彦 九 郎 | 一、二〇 | 〇八 |
| ◎小林鶯里著 | 赤穂義士(三冊) | 各 一、三〇 | 一〇 |
| ◎小林鶯里著 | 日蓮の生涯 | 一、三〇 | 〇八 |

◇ 東京市牛込區 文藝社 東京市牛込區 文藝社 ◇

世界文藝叢書

袖珍形美装
著者肖像入
各冊定價三十錢
送料六錢

極めて廣き範圍の讀書人を満足せしむべき圖書を提供するには種々困難なる條件に遭遇する。その主なるものを擧ぐれば、一、極めて廉價に提供し得る圖書。二、文藝趣味を有する人、また然らざる人にも歓迎さるゝ圖書。三、外國語の素養ある人、また之なき人にも讀まるゝ圖書。四、學生諸君又は一家・社會・國家の務めに多忙なる人に對し極めて僅かなる時間に於て趣味と實益を供給し得らるゝ圖書。五、永久に歓迎さるゝ圖書等。如上五項目は是非備へねばならぬ。本叢書發行の趣旨は、この五項目を基礎として、何人も知らねばならぬ世界の文藝上の名作を、廣く紹介せんとするにある。

◇既刊書目次の如し

| (錢十三冊各) 録目書叢藝文界世 | |
|-----------------------|----------------------------|
| (1) ハムレット シエクスピヤ作 | (9) 惡魔の子分 シヨウウ作 |
| (2) サロメ ワイルド作 | (10) 百人一首略解 藤原定家選 |
| (3) ファウスト ゲーテ作 | (11) 犬と熊 チエホフ作 |
| (4) ヴェニス商人 シエクスピヤ作 | (12) 武器と人 シヨウウ作 |
| (5) 夜の宿 ゴリキイ作 | (13) 巴里 ソラ作 |
| (6) マダダ ズウダアマン作 | (14) トリアングレー オスカールワイルド作 |
| (7) 青い鳥 メーテルリンク作 | (15) 日本永代藏 井原西鶴作 |
| (8) 思ひ出 フェルステス作 | 以下續刊 |

◇東京市牛込區新小川二丁目四番地 文藝社 總發行所 東京市牛込區新小川二丁目四番地 電話二〇一一番

◇東京市牛込區新小川二丁目四番地 文藝社 總發行所 東京市牛込區新小川二丁目四番地 電話二〇一一番

近松傑作集

四六列美裝
各冊定價六拾錢
送料六錢

近世の我が文學史上第一に指を屈すべき者は言ふ迄もなく近松巢林子であらう。彼が残した百數十編の作品は何れも今日燦然たる光を放つて居る。彼の卓越したる技巧、豊富なる詞藻、流麗なる筆致はまさに日本文學の中には其の類例を見ないのである。殊に彼が筆を進むるに當つて音樂的の調子を整へて行く點に至つては古今幾多文士の追從を許さない所である。加ふるに彼は脚色、結構の上に、最善の努力を注ぎ、複雑と變化とを求めながらも、そこには亂れざる全體の統一が見えるのである。本集は其の原作を嚴密に校訂したるものである。

第一編 心中天の網島

第二編 會根崎心池

(以下刊)

東京市牛込區 文藝社 電話二〇一一番

出版法規全圖

出版法規總覽

出版物は文化的的價値と同時に經濟的價値である。従つて之は對する法律制を認め、著作權を保護するに當り、其の利益を確保し、其の秩序を維持するに努むるべきである。出版法規は、吾人の此の遂に其の世界的出版界に於て永遠の勝利を得るに關するが出來なく、其の利益を確保し、其の秩序を維持するに努むるべきである。出版法規は、吾人の此の遂に其の世界的出版界に於て永遠の勝利を得るに關するが出來なく、其の利益を確保し、其の秩序を維持するに努むるべきである。出版法規は、吾人の此の遂に其の世界的出版界に於て永遠の勝利を得るに關するが出來なく、其の利益を確保し、其の秩序を維持するに努むるべきである。

菊判布裝九ボ二段組
定價百五拾錢
送料十八錢

東京市牛込區 文藝社 電話二〇一一番

—讀者の藝文の主とせよ—

雜誌

藝文

月刊

毎月一日發行——定價貳拾五錢——送料一錢

○文藝を手にならずして文藝を語る可らず

◎文藝趣味の鼓吹!

隠れたる青年文士を世に紹介せんぞす。
諸君の作品に對しては絶對に尊重を與ふ。
誌上を開放し讀者にはあらゆる自由を與ふ。
定價の低廉なるは利益主義に非ざる事を證す。
趣旨に於て他の雜誌と異るところを誇りぞす。
讀者諸君自身の雜誌!

◇文壇への登龍門

創作。散文(抒情、叙事、叙景)感想。短文。
詩。短歌。俳句。川柳。讀者文藝。

每號懸賞募集(毎月十五日締切)

◎純粹文藝の宣揚!

○學生諸君及投稿家唯一の機關誌!

◇ 東京市牛込區 文藝社 振替口座 東京 二〇一〇番 ◇

終

